

DEUTSCHE PRÄPOSITIONEN
---- eine semantotypologische Studie ----

意味形態を中心とする
ドイツ語前置詞の研究

東京 三 修 社 版

1977年12月25日 新装 第1版発行 著者 関口存男

序 (1)

▷ 量から見ても、また項目を一見しても解る通り、本書は決して前置詞の凡ゆる形態を洩れなく網羅したのものでもなく、また *Nachschlagebuch* として編纂したものでもありません。過去一カ年の間、独文世界思潮に執筆して来た前置詞研究の各項目を仮に一本に纏めて見たに過ぎないのです。多少修正を加えた点もありますが、大体雑誌に掲載した通りのものです。

▷ だからまあ謂わば断篇のようなものですが、しかし、『前置詞は如何にして研究す可きか』という根本方針の上で多少貢献する所があるかも知れないと思って、ほんの前置詞の一部だけしか取り扱っていないのを承知の上で単行本にして見たわけです。完全な研究はいずれ詳しい文法書として後年纏め上げるつもりでいますが、平易な談話調で心置きなく詳述することの出来るのは、まずこうした機会に依るの外はないでしょう。その意味で、決して無駄な努力ではなかったと思います。

▷ 本書では、度々『意味形態』という語が用いてあります。この語を詳しく説明するには、少し込み入った検討を行わなければなりません、いずれ其の機会もあるだろうと思います。本書に関する限りは、まず本書の所々に散見する方法論的討議の中から其の用語に対する何等かの暗示を読み取る可く試みて下さい。此の概念が実は私の文法研究の永久の *Thema* なのですから、此の前置詞研究に於いても、所々此の一般的問題に対する展望を機に応じ時に臨んで挿入したわけであります。

▷ 完全な前置詞研究となると、これはとても大変な仕事で、私は現にそれを系統的にやっていますが、そうなるに勢い謂わゆる『解り切った場合』をも重要な項目として編入する必要が生じたり、注目す可き面白い現象が反対に極く隅々の方へ隠れてしまったりして、どうも、普通の意味に於ける高級学習者の役に立つような述べ方をするのが困難になります。本書は、たとえ完全ではなくても、これだけ覚えて置けばかなり眼が開けて来ると云ったような、多少困難な、しかも『よく用いられる』場合のみを研究したものです。なお、本書以外に、三修社発行の『和文独訳の実際』に於いて、別に下のような項目が取り扱ってありますから、同好の士は御参照下さい。

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. 結果の in | 8. 狙う目標の auf |
| 2. 結果の zu | 9. 吟味の際の着眼点を意味する auf |
| 3. Idenzitäts-in | 10. 限度の auf |
| 4. 局限化的 in | 11. unter と動作名詞 |
| 5. 獲得目標の um | 12. 警戒の vor |
| 6. 内容挙述の an | 13. 「.....の余り」という vor |
| 7. 性質を指す an | |

著 者 識

序 (2)

この書は、実は昭和 18 年に出したもので、昭和 32 年の今日から見ると、心境の点で、色々と複雑なことを考えさせられます。

わたくしは、ドイツ語の研究者として、実は少し実力にあまることをたくらみ過ぎ、従来の伝統を脱した自己独自の言語の見方をドイツ語をダシにして展開してやろうなどということをして若い時に思いついて、それに一生をささげてしまったのです。ところが、現実には苛烈で、そんなことをやっている傍ら、だいいち食って行かねばならず、食って行くには、たとえば雑誌の原稿なんてものを書かねばならず、書くためには、全然自分の仕事と無関係なことは書けないものですから、今現に研究していることの中から、ちょっとまとめればまとまりそうなことを抜き出して一晩か二晩でまとめねばならず.....そういう風にして、まるで御用ききに声を掛けられて今晚のお総菜を数秒首を傾けて決定してしまう家婦のようないそがしさで書きなぐってしまったのが、この書、ならびに"和文独訳の実際"、"独乙語講話" などという "拙" 著で、これらはすべていちど雑誌にのせた原稿の収録にすぎません。

さて、晩年になって、その本来の研究なるものを執筆しつつある今日となって見ると、お恥ずかしい次第ですが、私も他の多くの人たちと同じような過ちを犯してしまったことに気がつきます。というのはすなわち、計画ばかり大きすぎて、実行には、少し時日が足りなくなってしまったのです。即ち、ドイツ語文法の全分野に亘って、かなり多くの問題を解決し、かなり多くの問題を提示するに足るだけの材料と準備と思想と基盤とは出来てしまったが.....悲しいかな、もう余年があまりないのです。

いまちょうど冠詞論をやっていますが、ひょっとすると冠詞論だけでおしまいになるかも知れません。つまり、計画したことの十分の一ないし二十分の一で人生がおしまいになるわけです。

ところで、冠詞論を書いている最中、たびたび問題になるのが前置詞の用法で、これだけは、せめて此の書その他でいろいろな印象的な普通の場合だけでもチョツチョツとまとめておいてよかったと、つくづく思います。たとえ、ごく啓蒙的な、不完全な説き方であるにせよです。

これが本書のような中途半端な小冊子を再刊する個人的理由です。

1957年10月 著者識

目次

- I 無意味な es と mit, um との関係
- II Was と an (von) の構造
- III 部分的処理完成の an
- IV 附帯描写の mit 又は in
- V 『仕打ち』の an
- VI 『附属対立』の zu
- VII 『用向き』を指す auf
- VIII Identitäts-von
- IX 責任の所在を指す von
- X 験証の an
- XI 『場合』の bei

I
無意味な es と mit, um との関係
[I]

I. 一格の es と mit.

次のような文の意味がわかりますか？いや、意味がわかっただけでは困る、それを構成する各部分と、その構成法そのものがうなづけますか？

Es geht rückwärts mit ihm.

意味の方は、日本語で云ってしまえば何のわけもない、つまり「あいつは左前になってきた」とか、「あいつは愈々下り坂だ」とか云ったような意味です。また、実際その「下り坂」(bergab)という文句を使って

Es geht bergab mit ihm.

と云っても同じ意味になります。もっと甚[はなは]だしくなれば、「あいつは愈々おしまいだ」-----即ち

Es ist aus mit ihm.

Es ist vorbei mit ihm.

などとも云える。ところで、これら凡ての云い廻しに共通なのは、es という有形無意の一格、すなわち文法家の所謂「非人称主語」なるものと、それから、日本語で云って見た際に主語になる「かれ」という人間が、独文にあっては mit という、一寸得体の知れない変な前置詞を伴うという点です。

以上に挙げた例だけでは一寸首肯できないかも知れませんが、いわゆる「非人称主語 es を伴う熟語」なるものの用法を研究し、同時に前置詞の mit の用法の色々な場合を検[しら]べて行くと、一見何の関係もないように思われる両者の間に、或種の一般的法則が支配していることが解って来ます。非人称動詞そのものの心理的な説明、それから mit そのものの微妙な機能そのものを分解して考えるということは、此の記事の框[わく]をはみ出す嫌いもあり、また一寸簡単には行きそうにもありませんから、只今問題になっている事を理解するに必要なだけの分解にとどめて置きます。

非人称 es の心理的観察については小生監修ドイツ語大講座第 4 卷非人称動詞の章、----es の用法の諸種の場合は、三省堂発行、拙著、新独逸語文法教程第 40 課「es の用法」に出づ。

そもそも、非人称動詞というものは、たとえば es schneit 等の如く、そのものには、普通は何の意味もないと考えられているようです。それは発音法を見れば益々明瞭です。すなわち es schneit は、たとえば、前綴りにアクセントのない geschneit を発音する時のように、es はほんの付け足しのようにして発音されます。換言すれば、esschneit という一つの語であるかの如くに発音されるのです。心理的に云えば、es の存在はほとんど意識されないで、単に schneit のみが意識されると云っても好いでしょう。現に拉丁語、伊太利語、西班牙語等では、こういう時には schneit に相当する語だけがあって、es なんてものは用いません。実際 "schneit" だけで好い訳ですからね。---- 要するに、es schneit という云い方は、換言すれば「雪降りという現象が起こる」ということなので、「何が」そんな現象を現象するかという、その「何が」は全然問題にならないのです。ただ、一つの文章には、形式上の要求から、どうしても ---- たとえそれが単なる有形無意なものであるにせよ ---- 主語というものが無いと形がととのわないから、ほとんど何の意味もない es を玄関の飾りに置いておくと云う訳です。

以上が分解の第一段で、次は第二段の分解です。先ず注目して頂きたいのは、例えば Es weht der Wind (Der Wind weht の代わり)などと云う、謂わばロボット社長を先頭に立てた、いやに改まった形です。この場合主語は二個になるわけで、es が文法上の主語(grammatisches Subjekt)と呼ばれ、der Wind が logisches Subjekt と呼ばれることは、これはむしろ初歩の知識に属すること故、茲では詳しくは述べません。一寸、順序として必要だから触れたのみです。

この、二重社長の現象は、一寸断ったように、非人称動詞や、非人称熟語には決してこんな事はないので、それは普通の文が、そうしようと思えばすべてそう出来るというのです。これを「文の非人称化」と云い、「現象」という性質を強調せんとする時に主として用います。

では、本当の非人称動詞はどうなるか？天候気象に関するものは前にも述べた通りです。この辺から一寸注意をして下さい。

けれどもです。けれども、とにかく *es* という言葉が文の主語には相違ない。ロボットでも何でも社長は社長です。形がある以上は全然存在しないものとして扱うことはできない。そこで色んな無理が起こって来る。たとえば、本当に意味のある主語が必要になってきた場合にはどうするか？意味上の主語（いわゆる「論理上の主語」*logische Subjekt*）をどういう名義で引っ張り込むか？ロボットの社長と二人並べて椅子にすわらせるか、それとも副社長としてロボット君の横の方へ付けるか？

社長が二人いるなんてのはあんまり感心しませんね。ところがドイツ語にはそれがある。すなわち、熟語的な非人称動詞ではなくて、元来普通の主語を置いても好い場合に、それを特に一つの「現象」として改めて紹介したい場合には、たとえば *Es weht* の主語はすでに動詞そのものの中に初めから含まれていると云っても好いような意味のものが多から、わざわざ主語を入れると云う必要は生じてきません。その他に、人間の気持等、心の中、身体の中の現象を指す、たとえば *es friert mich*（私は寒い）等があるが、これは、主語を *mich* 又は *mir* 等、三格四格にして入れることになっているのは、これも初頭の知識に属します。

後に残るのは、一番厄介な、「非人称熟語」なるものです。これが前にあげた *Es geht rückwärts* 等で、これはもう、数としても非常に多く、またその用法、意味が非常に厄介であるが故に、初頭の文法書などにはあまり詳しく述べてありません。それらは勿論一つ一つに当たって研究すべきものではあるが、それらに共通である一般的法則だけは心得て置く必要があるから、それを茲で述べるわけです。しかし、以上のように述べて来た以上は、大抵もう説明しなくても解る通り、結論として大掴みに云うと一寸次の様な法則が得られます。

一格の *es* と *mit* との関係

Es weht der Wind 等、いわゆる「普通文の非人称化」に於いては、意味上の主語は一格にして入れるが、*Es geht rückwärts* 等、いわゆる非人称熟語に於いては、意味上の主語は *mit* を伴う随伴的位置に貶置[へんち]されるのが之等の熟語に共通なる法則である。

実例は、これが只今の研究の出立点となる重要現象ですから、なる可く豊富に附することにしました。熟語だらけ故多少困難があるかも知れませんが、高級程度の研究者としては必ず知って置かなければならないものばかりです。

熟語に通ずる法則とは云ったが、実は堂々たる一つの文法です。この呼吸を呑み込んで、且つ相当の実例を暗記して居ればこれらのいわゆる「熟語」なるものは、いくらでも類造することが出来るのです。非人称動詞ですらも、たとえば近頃は *Es funkt*（放送が行われる）なんてことを云っても解るようになって来ているのですから、ましてや非人称熟語等に至っては、既に熟成したものと今や熟成しつつあるものと、強いて熟成させんとしつつあるものとの間の境界は非常にボヤックとして (*fließend*) います。一般的法則を知っていないと、辞書なんか引いたって駄目なことがあります。単なる「語感」にも語感の文法がありますからね。熟語だからと云って、全然形式を無視して結晶するものではない。結晶するにも或種の法則がある。その一つだと思って下さい。

一格の *es* と *mit* を伴う熟語の文例

1. *Es nimmt kein Ende mit der Krise.* 不景気は却々[なかなか]やみそうにもない。
2. *Ich bin abgebaut, es ist aus mit mir.* 俺は解雇された、俺はもうおしまいだ。
3. *So weit ist es mit uns nicht gekommen.*

俺達だってまさかそんなに落ちぶれた訳じゃないさ。

4. Wie ist es denn mit deinem herrlichen Plane geworden?
おまえの素晴らしい計画は一たいどうなったんだい?
5. Mit seinen Sprachkenntnissen ist es natürlich nicht weit her.
あいつの語学の知識なんて、勿論大したものじゃない。
6. Es ist vorbei mit ihm, er ist hinüber. (Schiller, Wilhelm Tell.)
かれがことおわりぬ、かれ今や亡し。
7. Soll es endlich ernst damit werden? では愈々本当にそうするつもりなのか?
8. Wie ist es eigentlich mit deiner Heirat zugegangen?
君の結婚は、あれは一たいどうしたいきさつだったのかね。
9. Es geschieht immer etwas mit einem, solange man hienieden wandelt.
此の世に生きている限りは、何か事が起こるとしたもののさ。
10. Sie wollte nur zeigen, dass es mit ihrer Drohung im Ernste gemeint sei.
彼女は、ただ、自分の脅し文句が本気だということを見せようとしたにすぎなかった。
11. Aber sie hatte nicht gedacht, dass es eine solche Wendung mit der Sache nehmen würde.
けれどもまさか斯う云う風な風向きになって来ようとは夢にも想わなかったのであった。
12. Und wie wird's sein mit den Zinsen?
ところで御利息の方は如何相成りまするでございましょうか?
13. Es ist mit der Erziehung der Kinder wie z. B. mit dem Forstwesen.
子供を育つるは、たとえば林業事業の如し。
14. Mit diesem Ringe hat es seine eigene Bewandnis.
この指輪には一寸わけがあるんでね。
15. Man sieht, wie misslich es mit der sogenannten Wissenschaft aussieht.
謂わゆる学問なるものがどんなに情けない状態にあるかは、これを以ても解るでしょう。
16. Ich weiß nicht, wie es sich mit der heutigen Innerpolitik verhält.
現今の国内政策がどういう風なことになっているのか、私にはわからない。
17. Mit deiner Frau hat es seine Richtigkeit nicht.
君の妻君は少しどうかしているぜ。
18. Diese Leute glauben, dass, wenn es nur mit ihrem Geldbeutel wohl gehe, es auch mit dem Glücke der Gesellschaft wohl bestellt sei.
こう云う人達というものは、自分の財布の都合さえよければ社会の幸福も申し分なしだと思っている。
19. Mit meiner Erbschaft wird es kläglich genug ausfallen, denn ich habe erfahren, dass mein Vater arm wie eine Kirchenmaus ist.
おれの遺産は大したことにはなりそうもない。というのは、聞いた所によると、おやじの奴め、とても貧乏なんだそうだから。
(教会の鼠の如く貧乏、という熟語)
20. Es sah zwischen den beiden Männern nach einem Zank aus, indessen hatte es damit nicht viel zu bedeuten.
兩人は一時は一寸喧嘩でもしそうな様子に見えたが、しかし、まあ別に大した事もなかったらしい。
21. Mit seinem Lieben läuft es zum Ende auf lauter Spielerei hinaus.
あいつの恋愛は、結局は要するに戯れに陥ってうんだ。
22. Wie es auch mit seiner Philosophie beschaffen sein mag, berühmt ist er doch geworden, das ist wahr.
あいつの哲学はまあどんなものだか知らないが、名高くは確かになったね、いやまったく。
23. Eine ganz andere Beschaffenheit hatte es aber mit seinem Privatleben.
ところで、彼の私的生活となると、こいつはもうすっかり別物であった。

24. Er passte nicht in diese Zeit. Diese Zeit war Deutschland nach dem Weltkriege. *Mit jedem Menschen, der harmlos und heiter war, ging es bergab.*

彼は時代に適しなかった。時代というのは、つまり大戦後のドイツである。この時代には、いやしくも天真爛漫な、快活な性質を持っていた人間はみんな落ちぶれたものだ。

25. Von allen den großen Verheißungen, mit denen dieser die Seinen in den Kampf um die Präsidentschaft führt, ist nur sehr wenig übrig geblieben. *Es ist nichts mit der 15*

Millionen-Partei, nichts *mit dem* sichern Ende der Inflation, nichts *mit der* Agrarreform.

己が徒党をば大統領選挙戦に駆り出すに際して、この男が標語として彼等に約束したところの多くの誇大な宣伝項目は今や目もあてられないことになってしまった。『千五百万の党員を擁する大政党』もお流れ、『インフレの終熄日を期して待つべし』もおじゃん、『農地改革』もペシャンコ。

[II]

II. 四格の es と mit.

熟語の中に含まれている形式的な四格の es というのがあるのを御存じでしょうか？
たとえば

Ich meine es gut mit dir.

これは es mit einem gut meinen (或る人に対して好意を抱いている) という熟語で、es は別に何も決まったものを意味しない。謂わば Füllwort (填詞[てんし]、贅語[ぜいご]) です。茲まではまあどんな文法書にでも書いてある。ところが、それに属する熟語の例がほんの二三しか挙げてない。これは一寸単に話の順序の上で必要なことに過ぎないのだから、あまり紙数を割くわけには行かないが、出来るだけ多く並べて見ましょう。(拙著新独逸語文法教程 P. 261 の § 387 の翻訳をして見るわけ)、

1. Sieh, ich meine es gut mit dir !

これこれ、わしはお前さんの為を思って云うのじゃぞ。

2. Seine Eltern haben es jetzt so schwer.

あの人の御両親たちは近頃は全くお大抵の事じゃござんせぬ。

3. Er nahm es mit seiner Aufgabe kolossal ernst.

あいつは自分の使命(課題)をととても真剣に考えた。

4. Er will es allen großen Männern gleichtun.

あいつは古今の偉人たちに負けをとらない心算でかかっている。

5. Ich kann es hier nicht aushalten.

こんなどころにいてはとても我慢がならない。

6. Unser Lehrer nimmt es mit der Aussprache nicht allzu genau.

おれ達の先生は発音のことは余りやかましく言わない。

7. Wer sich untersteht, ihn anzugreifen, der hat es mit mir zu tun.

渠[かれ]に喰ってかかるような生意気を敢えてする奴には、吾輩が相手になって仕[つか]わす。

8. Er hat es sogar zum Parteihaupt gebracht.

あいつは党首にまで漕ぎつけた(のしあがった)。

9. In einem fremden Hause macht man es sich nicht ohne weiteres so bequem.

余所の家へ行けば、そうアッサリと打ち寛[くつろ]ぐわけにも行かない。

10. Wie weit hat man es bis zum Bahnhof?

駅まではいくらありますか？

11. Ich bemerkte ihn, ließ es aber vorerst bei einem flüchtigen Gruße bewenden.

ちらと姿は見かけたが、まあ一寸通りがかりの挨拶だけにとどめておいた。

12. Er stand im Ruf, es mit vielen Mädchen zu halten.

渠は、いろんな女と関係しているという噂であった。

13. Ich stehe um 5 Uhr auf, weil mein Vater es so haben will.

おやじがそうしろと云うから、僕は毎朝五時に起きる。

14. Bismarck war ein Jäger, Reiter, Schwimmer, Fechter, Esser und Trinker, der es mit jedem aufnahm.

ビスマルクは、狩猟、乗馬、水泳、剣術、食事、飲酒等、何にかけても、誰でも来いという剛の者であった。

15. Auf hohe Ziele hat er es überhaupt nicht abgesehen.

高遠な目的なんてものは第一彼の志すところではなかった。

以上のうち下線を施したところはすべて熟語として必要な要素です。たとえば、「或る物をねらう」は **es auf etwas abgesehen haben** であって、完了時称のままに現在の意味に用いるから **haben** は省かれ得ない等、とにかく下線のところは厳密に考えて貰わないと不可ません。

以上は四格の無意の **es** を伴う熟語の極く数例にすぎませんが、どんな事実を指しているかは略明瞭になったでしょう。

ところでこんどは、以上にあげた熟語を、この講義の主題である **mit** という前置詞の立場からして観察して頂きたい。尠なくとも、これらの熟語の中には、(全部ではないが) **mit** を要求するものが非常に多いという事が云えます。

たとえば **es mit etwas ernst nehmen** なぞが典型的な例です。日本語では、或る事「を」真剣に考える、という。その「を」でも一寸わかる通り、動もすると **etwas ernst nehmen** と云った様に考えて、「彼は彼の使命をむきに考えている」を **Er nimmt seine Aufgabe ernst** と云いそうです。また、この場合は、現にそうも云いますが、しかし、それとは別に、**Er nimmt es ernst mit seiner Aufgabe** と云う事を知っておかねばなりません。**es** という四格が既に(形式的にもせよ)目的語の位置にのさばっているから、その上にまたもう一つ四格をつけるという事は出来ない。そうかと云って既に耳慣れてしまった付き物の **es** を取り去って、其の位置に、**Aufgabe** を置くということは、既に結成してしまった熟語に対する感じがこれを許さない。そこで、前号で問題になった一格の **es** の場合と同じような筋路でもって、**mit** を用いるわけです。

一つ重要なことを断って置きます。四格の **es** があって、それと同時に **mit** があれば必ず此の型に属するとは限りません。たとえば、前に

Ich meine es gut mit mir.

という例を挙げましたが、此の際の **mit** は、誰々「に対して」と云う **mit** であって、今茲で問題になっている **mit** の用法とは何の関係もありません。(その他 **der hat es mit mir zu tun** 等、そう云った様な **mit** が割合に沢山出て来たから、此の点は特に注意して下さい。)---それに反して、先ず **Ich meine es ehrlich** (私はそれを律気に考えている.....) と云うと、その次には当然「それをとは一たい何をだ?」という事が問題になる。もしそれが例えば **eine Warnung** (警告) であるとすれば、

Ich meine es ehrlich mit meiner Warnung.

(私は私の警告を正直に考えているのだ、即ち、私の警告は本当に正直な気持ちから発したものだ)

ということになるのです。

1. Die Jugendlichen, besonders die männlichen, nehmen es mit dem Berufswechsel ganz leicht.

若い人たち、殊に若い男たちは、職業の転換を極く無造作に考えている。

2. Die Gasheizung ist nicht recht bequem, ich muss es mal mit der elektrischen Heizung versuchen.

瓦斯暖房はどうもあんまり便利ではない、一つ試しに電気ストーヴでも使ってみようかしら。

3. Diese Leute nehmen es mit Grobheiten nicht so genau wie wir Gebildeten.

此の人たちは、われわれの様なインテリとは違って、少しひどい事を云ったって大して気にかけない。

4. Er hatte sich, wie er sagte, recht viel Zeit gelassen, um sein Lebenswerk vorzubereiten.

Auch mit seinen kleineren Schriften habe er es immer so gemacht.

渠の言によれば、渠はその一代の傑作を準備せんがためにはかなりゆっくりと暇を見積もったという話である。それ以外のちょっとした著述でもやはりみんなそう云う風な書き方をしたのだそうだ。

5. Man wartet ja schon ein Stündchen draußen.

Macht's kurz mit eurer Auseinandersetzung !

みんなが表でもう小一時間も待っているんだぜ。議論なんかもう好い加減にして切り上げ給えよ。

無意の es を強めると das になる

一格の es にしろ四格の es にしろ、これを特に強めると es の代わりに das を用いるという現象には特に注意する必要があります。何の意味もないものを強めるとするのは、実際の場合を云わないと一寸判らないかも知れませんが、たとえば

Wir haben es fein gemacht. 我々はうまくやってのけた。

という熟語があります。この es を das にかえて、しかも其の das を強く発音すると、意味は同じでも、es の場合よりは少し俗語めいた、砕けた調子になります。

1. **Wir haben das fein gemacht !**

2. **Das haben wir fein gemacht !**

勿論こう云うものにも、「何を」という四格の目的語に当たるものを入れるには mit を用います。

Das haben wir wirklich fein gemacht mit unserer Außenpolitik !

(こんどの外交はまったく大成功じゃないか、ええ?)

これは、調子の俗なもの (たとえば普通の俗調の会話が出てくる小説等) を読む時に必要な知識です。Er meint das nicht so schlimm (あいつだってまさかそんな甚[はなは]だしい事を云ったつもりではない) 等は、das があっても、それは es mit etwas schlimm meinen という熟語に当たるものです。此処で問題になっているような場合のみではなく、一般に、砕けた調子では es の代わりに das を用いることが非常に多いのです。

[III]

前から述べて来た mit の機能に就いて、こんどは其の心理的根拠を一寸説明します。mit の基本的な意味は勿論「云々と共に」ですが、たとえば Ich gehe mit ihm と云えば、ich の方が主として考えられ、その次に、それに附帯して er と云う人物が問題になります。mit はつまり「附帯的」なものを挙げる時に用いると云えば、その諸種の用法が漠然と定義されるわけです。「を持って」でもなく、「と共に」でもなく、「と一緒に」でもなく、日本語の「で」でもなく、それら凡てに共通な mit の概念は何かと考えて見ると、これはかなり漠然たるもので、何等かの定義が可能であるとすれば、それは「主なるものに対する副なるものの関係を挙げる」というか、それとも単に「附帯的事実を挙げる」とでも云うより仕方がないでしょう。しかも其の最も形式的な要素だけが、他の「以て」や「で」や「一緒に」などを離れて、ドイツ語では特に目ざましい発達を遂げているのです。

Ich gehe mit ihm の例でもわかりますが、ich が主で、er が副だと云ったのは、それは文法関係から見て云ったので、意味の方から云えば或いはその反対かも知れません。「私は彼のお伴をする」と考えれば、彼が主で ich がむしろ副になって来ます。丁度それと同じ現象が他の場合にも起こって来ます。参考のためにその一つをあげると、

描写的附帯物を指す mit

次の文を、その意に忠実なる如く訳するとしたら、どういうことになるでしょう?

Sie sind ein seltsamer Mensch mit Ihrer Mischung von Güte und Leichtsinn, von Torheit und Vernunft !

(あなたは、善良さと軽率さ、馬鹿さ加減と分別とのあなたの混合を以て、実に妙

な人間でおいでになる)。

こんな直訳をしたら何の事だかわからない。けれどもまあ大体云わんとするところはわかります。以上の文は主語 Sie の直後に mit 以下を持って来て Sie mit Ihrer Mischung.....と云っても好いところで、こうした mit は大抵主語を受ける物主形容詞(茲では Ihrer)が mit の次にあるのが特徴です。もう一つそうした例を挙げて見ると、

Gesetzt auch, dass Sie am Ende recht behalten, so werden Sie gewiss noch eine geraume Zeit mit Ihrer neuen Lehre allein stehen.

(結局まあ貴君の仰言ることに道理があるにしたところで、屹度ここ暫くのところは、貴君は貴君の新たな説を以て孤立なさるでしょう)。

意味を取って云えば『貴君は』というよりはむしろ『貴君の新説は孤立無援でしょう』ということです。

上の二例に於いて(こうした mit の用法は盛んに現われて来ます)mit 云々の句は一たい文章全体に対してどうした関係に立っているのでしょうか。「以て」や「で」や「一緒に」なんて概念は通用しない。訳は直訳だから「以て」とやって置きましたが、その「以て」が、決して手段などを指す以てでない事は訳文を見ただけでもわかる。むしろ、主語だけでは云い足りなかったことを mit で補足附加するだけの話です。此の場合、ドイツ人の語感には、mit に対して非常に寛大な考え方をしているわけで、こう云う塩梅に mit を用い始めた以上は、mit なるものの考え方がとても自由になり曖昧になって、遂には、前から問題にして来た Es geht bergab mit ihm 等の mit の用い方が生ずる筋路が略見通せると思います。かなり mit の概念が漠然としているようではあるが、主語、目的語、その他「何か名詞的な中心」に、附帯的な形式を借りつつ内容を補足して意味を完全にすると云う点で充分にその本質を窺う事ができます。

Hinaus mit dir !

こうなると益々 mit の意味が、内容が消えて形式だけ残って来、同時に、意味が軽薄になって行くに従って形式と機能とが明瞭になって行きます。前述の mit にはまだ「以て」と云っても幽かに通ずるような概念がありましたが、こんどは「汝を以て外へ！」では全然何の事だかわからない。決して「汝を連れて表へ出ろ！」という事ではなく、「汝なんか表へ出てしまえ！」ということです。つまり du という主語が mit dir という形式で現われているのです。Hinaus ! (表へ!)だけで文が完成していて、それ以上、文法形式としてはもはや主語を要求しない。だから Du hinaus !と云えない。Hinaus du !とも云わない。Hinaus !という運動が du なる主体を「伴い」つつ(或いは「曳きずり」つつ)行われるのだ、という極く漠然たる定義し難い関係を基礎として mit dir と云うわけです。運動なる現象自体を「主」にして考えれば、その運動をする物体の如きは単に「附帯的事実」(begleitender Umstand ; begleitendes Moment ; Begleiterscheinung)に過ぎません。それが証拠に、ある種の現象にあっては、その現象を現象するところの主体が全然わからない事がある。病気などがそれで、現象だけがいやにはっきりしていて、その主語は遂にわからずじまいになることが多い。たとえば「痛い」という現象が何「を以て」(mit)行われているかは、よほど診察して見ないとわからない。

斯う云う点でドイツ語は非常に現象(又は「作用」「動き」そのものに忠実で、主体の方が印象的にハッキリしている場合は勿論主体を主語にして云いますが、(まさか「父が来る」を Es kommt mit dem Vater とは云いません)、現象の方がハッキリしているものは、その現象を名詞で表わすか、代名詞で表わすか、それとも動詞その他で表わすかに拘わらず「主体」とでも云うべきものを、構文要素としてはむしろ随伴現象の位置に貶置して、(謂わば「中心」から一寸横へずらせて)その貶置された語に mit を用いるというわけです。

Das mit dem Ring war eine Verleumdung.

(指輪がどうのこうのという話は中傷だった)

これも Der Ring warとは云えないから、Ring を「附帯事情」としての das、即ち「指輪の件」と云ったのです。この mit も今までの用法を考える上に非常に参考になる

でしょう。

Die Veränderung, die *mit* meinem Bruder vorging. (私の兄弟の心境に起こった変化)。

此の文でも、現象は *Veränderung* だが、その現象を現象したところの主体は *mein Bruder* で、主体を主語にすれば、*Die Veränderung, die mein Bruder durchmachte* とでも云う所でしょうが、現象を主にして考えると上例のようになる。もっとも *in meinem Bruder* と云っても好いでしょうが、そうすると現象の起こった「場所」を指すことになって、「主体」だという感じを与えない。「主体」だという感じを露骨に表わさんがために、わざわざ *mit* を用いると云うわけです。

変なことになって来た。附帯的事実を示すためであった *mit* が、段々とその「附帯」という概念を失って、全然内容がなくなって、遂には附帯どころかむしろ「主体」を指すための単なる形式となってしまった。これが即ち我々が求めていた *mit* なるものの正体です。*mit* の諸相を研究するには、なかなかこんな大ざっぱな話では駄目で、私が目下立てている範疇だけでも既に二十八九項目に達していますから、事実には忠ならんとすれば恐らく三十以上にもなるでしょう。ここでは単にその重要な二三に触れたきりですが、仲々変わった使い方をする面白い前置詞だと云うことだけはおわかりになったでしょう。

mit の話は以上で打ち切って、こんどは、殆どそれと同じような *um* の用い方に就いて述べます。

一格の *es* と *um*

前項の説明によると、たしかに *mit* を用いる筈のところに、或種の場合に限って *um* を用います。たとえば---

Es ist ein eigenes Ding um das menschliche Herz.

(人間の心というものは妙なものだ)。

これもつまり、*um das menschliche Herz* のところに、いわゆる論理上の主語があると云えます。論理上の主語という言葉は一寸変な言葉で、言語現象の本当の「説明」ではなく、実は単なる「解釈」に過ぎないのですが、既に一般の慣用句になっているからまず無反省に使っておくわけです。実際現象に忠実ならんとするならば、それは要するに『人間の心をめぐってそれは一つの異様な事柄である』ということで、その文句通りに即して考えなければならないのですが、日本語では一寸変に聞こえるから、こういうところを語学の方では論理的な解釈法を立てて、これを一つの形式として教えて行くのです。

Es ist ein eigenes Ding mit dem menschlichen Herz、*um* の代わりに *mit* を使っては誤りでしょうか？今までの考え方に従うと、*es* があり、論理上の主語が来るから *mit* を要求するように思われる。たとえば *Wie hat es sich damit zugetragen ?* (それはどう云う風にして起こりましたか？その一五一十は？事の顛末はどうであったか？) という時の *damit* と同じ地位に在るように感ぜられる。

此の場合には *ist* というものに注意して頂きたい。A は B である、という、いわゆる *Nennsatz* (命名文) にあつては、*mit* の代わりに *um* を用いるのが古くから伝わって来ている由緒正しい語法です。しかしこれは必ずしも守られません。こういう際には、*mit* も *um* も、論理上の主語を指すための形式としてしか感ぜられていないから、結局どちらを用いてもよろしい。独逸人の語感では殆ど同じようなものとなっている。だから、たとえば、相当古い作家でも、現に斯ういう時に *mit* を用いています。(E. T. A. Hoffmann の "das Majorat" より)。

Ja, es ist ein eigenes Ding mit den Nachtwandlern. Anderen Tages wissen sie von diesem sonderbaren Zustande, von allem, was sie wie in vollem Wachen begonnen haben, nicht das allermindeste.

Nachtwandler (夢遊病者) でなくて *Nachtwandeln* (夢遊) という抽象名詞であつたら勿論 *um das Nachtwandeln* とやったところでしょうが、人間を考えたために、*um* よりも *mit* の方がよいという感じでもしたのでしょう (例えば *Was mit den Nachtwandlern geschieht*

等を考えて)。

A=B なる、いわゆる Nennsatz にあっては、やはり、um を使うのが正式で、その意味は大抵「一たい云々なるものは云々したものだ」という、一般的な宣言をすると同時に何か主観的な判断を附加する意味です。多少文例を挙げて見ると---

1. Ist aber doch was Schönes um das Familienleben !
矢張り何と云っても家庭生活というものは好いものだ。
2. Was für eine schöne Sache es um die Philosophie ist !
哲学って何という面白いものだろう !
3. Aber es ist etwas Merkwürdiges um das Gedächtnis.....
ところが人間の記憶という奴は変なもので----
4. Schlecht ist es um einen kinderreichen Vater bestellt.
子供の多いおやじはみじめなものだ。
5. Um die strenge Disziplin war es eine bloße Phraseologie.
「厳正なる秩序」なんて、単なる文句にすぎなかった。

以上の第五の場合はもう明らかに mit が用いられる型です。それから es is mit etwas soundso bestellt (或る物は斯々の事情である) は熟語故、特に記憶を要します。単なる sein と同意です。

その他、es ist um ihn geschehen (彼はもう駄目だ、彼が事休す) とか、Es ist schade um ihn (彼の為に惜しむ可きだ) 等も um の意が多少変わって行くとは云うものの、まず同じような方向に属します。

es の代わりに das, was 等

以上で、es と mit, um との関係に関する概要は終わりましたが、es について一言附加して置きます。es は通俗調に近づくに従って das で云い換えられる (Wie hast du das gemacht mit dem Abschreiben? 書き写すのは一たいどう云う風にやったんだい?) ということは前に述べましたが、この Das mit dem Abschreiben は、たとえ別々になっているとはいうものの、前にあげた Das mit dem Ring (指輪の件) と同じことになってしまうのは、今までの mit の説明をなおも明らかにする例証だと思えます。

また文法的関係によっては es の代わりに was, etwas (或いは es と共に etwas) が用いられることがあります。

Ich weiß nicht, was mit ihm geschehen ist.

あいつはどうなったのか俺は知らない。

Es muss etwas mit ihm geschehen sein.

あいつの身には何か変わったことが起きたに相違ない。

備考。---附帯描写の mit 等は、また後で項を改めて述べます。ここではただ説明の手段として触れたに過ぎないのです。意味形態なるものの微妙な差は、既に此の数種の形態を以ても充分感ぜられることと思えます。

II

Was と an, von の構造

Was gibt's Neues bei euch ?

「どんな種類の」「どんな性質の」を意味する Was für ein は既に御存じの事と思えます。Was für eine Veränderung wird man nun vor sich gehen ? (今度はさてどう云う変化が起こるだろう?) 又は Was wird nun für eine Veränderung vor sich gehen ?

此の際、für は、普通の意味に於ける「前置詞」ではありません。何でも前に置くものは前置詞だと云う事にしてしまえば別ですが、普通の意味通り前置詞という概念を極

く普通の意味に取って、その次(又は前)に来る名詞の格を或る一定の格に規定するものを前置詞と呼ぶならば、für は四格支配でなければならない。ところが Was für ein Mensch ist er? Was für einem Berufe widmet er sich? と云ったように、この für の後へは、一格でも二格でも三格でも何格でも来れるのです。これを以て見るに für は、前置詞の für (.....のために)ではなくて、接続詞の als (.....として)と同じ意の、又同じ機能をもった語です。Was für ein Mensch ist er? は Was ist er als Mensch? (とにかく人間には相違なさそうだが、人間はまず人間「として」置いて、さて人間「として」は一だいどんな人間であるか?)の意です。

以上は初歩の知識のおさらえで、さてこんどは序論に入ります。

Was für ein Mensch? の際には、Mensch が普通の名詞だから für を用います。(Was Mensch ist er? Was ist er Mensch は勿論大変な誤り。)----ところが、名詞の中には形容詞から転化して来るものがある。茲では特に中性名詞を問題にします。Menschliches (人間的なる事柄、---これは「弱点」「弱味」「可愛いところ」「人間として已むを得ない点」「ボロ」「急所」---弘法も筆の誤りという、その筆の誤り、過失---とにかくそんな事を指すこともあります) etwas Menschliches, nicht Menschliches, viel Menschliches, wenig Menschliches, etc. がそれに属します。こういう形容詞の中性名詞化が was と共に用いられる時には、für を用いても間違いではないが、普通は für を省くことになっています。Was ist dir für Menschliches begegnet? (君はどんな失敗をしたのだ)でもよろしいが、斯う云う際には Was ist dir Menschliches begegnet? と云える。Was gibt's Neues? (何か変わったことはありませんか? 近況如何?) Was hast du ihm Böses getan? (君は彼にどんな悪い事をしたのだ) Was ist dir Komisches aufgefallen? (何か変な点に気づかなかったかね?) Ich denke nach, was ich ihm Aufmunterndes sagen kann. (私は彼に元気づけるようなことを云う材料がないかと考えて見ている)。

etwas Menschliches に関する語学的考察

etwas, nicht, viel, wenig, was の次に、名詞化して es の語尾を取った形容詞を持って来る云い方は、これは初歩の知識に属しますが、一寸序でにその概念構造を検べて見ると、大分これから述べようとする本問題に近づいて来ます。これに相当するラテン語が非常に興味があつて、aliquid humani と云いますが、此の際 menschliches に相当する humani の i という語尾は、humanum (Das Menschliche) に対する Genitiv です。即ち中性名詞(形容詞から来たもの)の二格です。「の」に該当します。これを以て見ると、ドイツ語の etwas Menschlich-es の es という語尾は、ひよっとすると、中性一格の -es ではなくて、むしろ中性二格の -es ではないかという疑惑が生ずるが、現代独乙語ではそうではありません。ラテン語でも aliquid humanum と、一格又は四格で云わないこともありません。

然し、たとえば仏蘭西語で見ると、「の」という概念構造は今もなお生きています。quelque chose d'humain と、必ず de (ドイツ語の von) を入れて結びつく。ラテン語のように前の量詞と同格に並べて置くことは決してない。沢山人間的なことがある中「の」幾分か、又は「何物か」という構造です。nichts Neues 等の際も同じになります。(ラテン語 nihil novi; 仏語 rien de nouveau)。

此の仏語の de、ラテン語の二格に相当するものがドイツ語にもあるでしょうか? 否、こうした「の」とか、その中の「一部分を持って来る」とか、「そうした範囲では」とか、或いは前述の als, für 等に相当するものを実際に文字として表現したい場合が、或種の文章に於いては事実起こって来はしないでしょうか?

ドイツ語にも之れがあります。für, als と同じような機能をもったものがあります。an と von です。

前に引用した Was ich ihm Aufmunterndes sagen kann などでも、仏語で云えば勿論 de を用います (ce que je pourrais lui dire d'encourageant) が、ドイツ語でも、Was ich ihm an Aufmunterndem sagen kann と強いて云えば云えないことはありません。Was ich ihm von Aufmunterndem は少し無理だけれども、とにかく意は充分通じます。

an と von との区別は？

扱[さ]て、そう云う際に、an と von との間にはどんな区別があるかと云うと、これは非常に細かい問題で、an の方は、was の「内容」を詳述し、von の方は was の派生的「出所」を規定するとでも云うの外はありません。大抵の場合には、どちらを用いても大して変わらないものです。

für とはどう違うか？

für とはどう違うか？此の点に注意を向けると、問題の was.....an (von)という構造の特徴が文章論的にハッキリして来ます。即ち、実際上の応用を主にして云うと、was für.....は主として疑問文であり、was.....an(von)は主として疑問関係文又は関係代名詞文です。(これは仏語の *ce qui [que].....de.....* の *ce* というものが這入っている構造でもわかります)。

しかし此の点は必ずしも当たりません。Was haben Sie an Bar ?(現金ではいくら持っていますか?)と云えますから。また Ich weiß nicht, was er für eine Gesinnung hegt (私は彼が一たいどんな量見を抱いているか知らない)と、was für.....でも関係疑問文になり得ますから。

an (von) と für との間の差は、もっと意味に関係しています。für の場合には was は「質」を表わし、an (von) の場合は was はむしろ「量」を表わすのです。即ち Was er an (von) Bargeld bei sich führt と云えば、彼が現金として持っている「限り」のもの(これが量概念)の意ですが、Was er für Bargeld hat と云えば彼は一たいどんな「たち」(これが質概念)の現金を持っているか、の意になります。この「量概念」というやつが、an, von の際には非常に重要になって来ます。

an, von に斯様な用法が生ずる移り行きについては、いずれ後日述べる an, von の諸種の意味から推して察することが出来ると思えますから、ここでは述べません。(内容を示す an = der Vorrat an Tabak 煙草の持ち合わせ；部分化的 von = Von allen Lebewesen habe ich nur noch die Hunde gern. 凡ゆる動物の中で、好きなのは今の所犬つきりだ。----)

次に、文例によって此の構造の練習をしましょう。

Was と an の構造

1. Gehen Sie jetzt sofort nach Hause und verbrennen Sie dort sofort alles, was Sie von mir an (von を避けて) Briefen haben !
さあ、すぐ家へ帰って、私の方から上げた手紙をはやくみんな焼却して下さい。
2. Wenn ich jetzt bedenke, was ich damals an Verhöhnung, Beschämung und Verachtung alles erlitten habe ---- unfassbar, wie ich das alles ertragen konnte !
当時どれだけ私が嘲[あざけ]られ、恥ずかしめられ、侮蔑されたかを今にして思えば、どうしてあれだけの事が我慢できたか、ほとんど解らないくらいです。
3. Ich habe den Mut, an diesem Entschluss zu halten und alles, was er mir an Leid bringt, zu tragen.
私は此の決意を固執し、その決意がもたらす限りの苦痛に耐え得るだけの勇気があります。
4. Er zeigte freundlich jedem Besucher, was sein Schloss an Denkwürdigkeiten aus großer Vergangenheit birgt.
彼は、誰が訪ねて来ても、親切に案内しながら、己が城内に蔵されている限りの偉大なる過去から伝わった家宝を見せる。
5. Lass dich mit einem Weibe ein und du verlierst jede Freiheit. Und alles, was in dir an Plänen und Kräften lebt, alles das presst und peinigt dich mit Reue.
女なんぞに係り合って見ろ、自由なんてものは忽ち無くなって、己が心に秘められたかぎりの雄図[ゆうと]、精力が、忽ち怨嗟の声となって汝に逼[せま]り、汝をさいなむであろう。

6. *Was ihm an jugentlicher Behendigkeit fehlt, weiß er durch eine Spannkraft und Exaktheit der Gesten zu ersetzen, die ihm beide ganz eigentümlich sind.*
若々しい敏捷さと云う点で多少欠くる所があるにしても、彼は一挙手一投足の緊張力と的確性を以て之れを補う術を心得て居り、しかもその両者とも彼独特のものである。

Was と von の構造

1. *Alles, was meine Kinderzeit von Freud und Schmerz gebracht, habe ich seither schon wieder vergessen.*
幼年時代が齎らした喜怒哀楽は、その後またけろりと忘れてしまいました。
2. *Alles, was sie jemals von mitternächtigen Spukgeschichten gehört, erwachte in ihr, sobald sie allein schlafen musste.*
一人きりで寝させられると、今までに聞いた限りの真夜中のお化けの話が、またもや彼女の追憶の中に目覚めるのであった。
3. *Was sonst von Menschen im Hofe lebte, lag und schlief, denn es war gerade Mittagszeit.*
農園に生活している其他の人たちはみんな横になって眠っていた、というのは丁度お昼頃だったので。
4. *Wenn alles dasjenige, was von Geistern der Schulknabe herbetet, der große Haufe erzählt und der Philosoph demonstriert, zusammengenommen wird, so scheint es keinen kleinen Teil von unseren Wissen auszumachen. [Kant. Träume eines Geistersehers.]*
小学校の生徒あたりが無意識に口にしたり、大衆が物語ったり、哲学者が証明したりする所謂妖怪なるものを一括して考うるに、どうもそれらが吾人の[妖怪に関する]知識の相当の部分成しているように思われる。
5. *Es kehrt nur zurück, es kommt mir endlich heim ---- mein eigen Selbst, und was von ihm lange in der Fremde war und zerstreut unter alle Dinge und Zufälle.*
[Nietzsche. Zarathustra, III. Der Wanderer.]
そはただ還り来るにすぎざるなり、そはただ遂に我家に帰り来るなり---- およそ我等自身の自我にして久しく異郷をさすらい、物みな、かりそめなる事みなの中に散らばりいたるものすべてが。(人生觀に統一の生ずる時の心境を描写したるもの)。

was.....以外の構造もあり

関係疑問文以外の構造にも勿論これらの an, von が用いられます。was の代わりに何か数量を示す単語が来てもよろしい。この方は極くわかり易いから特に説明を要しません。

An Vorschüssen habe ich nur zehntausend Mark erhalten.
前払いはほんの一万馬克[マルク]もらったきりだ。

中性名詞化した形容詞には an, von を省き得

これは既に für を省き得る話をしたのと同じです。

Bleibe ledig, sonst geht alles zugrunde, was in dir Gutes und Hohes [an Gutem und Hohem の代わり] ist.

結婚はするな、結婚などすると頼母しい高邁なところが無くなるぞ。

Was kommt jetzt Schönes ? Sieh mal im Programm nach.

こんどはどんな面白い事があるのかしら？ちょっとプログラムを見てごらん。

Ⅲ 部分的処理完成の an

[I] 準備的考察

日本語の感じで考えると他動詞と思われるものが、独逸語では自働詞であることが随分多い。自働詞だとなると、四格の目的語を直接に置くことが出来ないから、大抵の場合前置詞を支配することになる。そこで前置詞の用法が重要になって来ると云うわけです。

動詞の前置詞支配は却々[なかなか]厄介な問題で、荒っぽく云えば其の場合に就いて覚えて行くより仕方がないのですが、少し詳しく研究して行くと、まんざらそんなに無秩序なものでもない。多少の分類を行うことも出来れば、また多少の論理を発見することも出来る。いずれにせよ、多少の類型が発見できる。たとえば本項に於いて述べる an の用法などがそれです。

四格支配と前置詞支配との意味上の相違

an の場合は一寸類型の理解が困難だと思いますから、まず、極く解り易い場合に就いて準備的な説明をして置きます。

たとえば、「彼は書物を開けて、しばらく読み耽った」と云おうとすると

Er schlug ein Buch auf und las es eine Zeitlang. は誤りです。las es の es がいけない。日本語的に考えれば「それを読んだ」のだから las es で一応差し支えなさそうに思われるが、ドイツ語ではおかしい。

Er schlug ein Buch auf und las eine Zeitlang darin. でなければいけません。四格支配の ein Buch lesen という語法は、極端に云えば「読了」することです。「しばらくの間読了する」は意味をなさない。二頁か三頁の書物なら、一時間の間に数回読了することができるから或いはそんな奇抜な言い廻しも可能かも知れません。(しかしそんな変わった意味ならむしろ und las es mehrere Male durch とか何とか云う可きでしょう。)ところが「しばらくの間読んだ」という日本語は、そう云う意味ではなくて、その書物の何処かをひろげて、或る頁から或る頁までを読んだので、決して書物「を」、即ち書物の「全体を」読破(読了、読み上げ、読みこなし、読み尽くし、等々)したわけではありません。基教信者が聖書を読むなんてのも大抵それで、あの厩大な図書館を全部駆け抜けるなんて事は決してない、聖書の「中」を読むにすぎません。

それに反して、「君は此の書物を読んだことがあるかね？」ならば Haben Sie dieses Buch gelesen? で好いでしょう。それに答えるには、もしそれが聖書とか Handbuch (「虎の巻」、「必携」)とか云ったようなもので、とても全部は読めないが、一部を一寸読んでも充分読み甲斐のあるものであれば、Ich kann nicht sagen, dass ich das Buch gelesen, sondern nur, dass ich darin gelesen habe. と答えなければならぬことが起こって来ましょう。

四格目的語の Dynamik

其処で一寸「抑々四格なるもの」の力学(Dynamik)的考察をして置きたいと思えます。四格の「意味」「傾向」「機能」「作用」などと云っても好いのですが、それではどうも云い足りない。ギリシャ語では意味のことを dynamis (力)と云いますが、これが最も適当です。(もっとも英語でも、the force of the accusative 等と、dynamis を force で云い表わすことが出来るようすが)。

目的語として用いられる場合の四格には、動ともすれば次のような力がこもり勝ちです。

[1] 動ともすれば、動詞によって意味される動作が、四格によって示される概念の「総体」に向かって(或いは：亘って)行われることを暗示する。

in einem Buche lesen ならば書物の「一部」を読む意だが、das Buch lesen というと書物

全部を読むことになる。つまり **das Fenster schließen ; den Plan ausführen** (計画を実施する) ; **einen Menschen töten** などと同じタイプに這入る。

[2] 従って意味の中心が、動詞の方によりは、むしろ名詞の方にこもるようになる。**das Buch lesen** と云う代わりに、**lesen** を結局どんな他動詞に変えても好いわけで、**das Buch in Kenntnis nehmen ; das Buch erledigen** (片づける)などと、とにかく「完了する」意の動詞なら何でも意味は通ずる。極端に云えば「書物を.....書物する」でも好いのです。斯ういう現象が極端になるといって、

den Krieg führen 戦争する
einen Besuch abstaten 訪問する
Bericht erstatten 報告する
Widerstand leisten 抵抗する

もっと甚だしくなると、

einen gesunden Schlaf schlafen
einen Heldentod sterben

などという、ほとんど動詞そのものは余計な付け足しに過ぎなくなるほど、それほど意味の中心が名詞の方に奪われてしまう傾向があります。こうなると、動詞そのものは、形こそ **führen, abstaten, erstatten, leisten.....**などと色々あるが、その意味は凡て、単に **tun** とでも云ったような、要するに「吾輩は動詞である」という事以外に何の意味もないほどの脱け殻になってしまいます。---- 事程左様に四格というものには意味の内容を己自身の方へ吸い取ってしまう力が備わっているのです。それに反して、前置詞を用いる目的語の場合には、意味の内容は動詞の内部でもって纏まっています。**er liest darin** という **lesen** は、それだけでもって「読書する」という意で、この「読書」という解釈にも露骨に現われている通り、**lesen** 一語の中に於いて既に目的語を含んでいるとも云えましょう。事実は勿論 **darin** などという補足を要するのですが、言葉の力としては、いわば所謂「自給自足的」(**autark**)なものです。己自身以外の、名詞などというものに、四格などという密接な関係に立って貰ったりする必要はない。

その癖、(いわゆる自給自足の国家なんてものが事実は矢張り不可能なように)**lesen** (読書する)といっても、さて何を読書するかが、矢張り往々にして問題になって来る。そうすると、四格の目的語を取るといことは言葉の勢いと纏まりが之れを許さないから、その名詞は、もっと縁遠い関係、即ち前置詞を介した関係を以て其の動詞と結びつくと言ふことになって来ます。

[3] 従って、四格目的語に向かって働きかける動作には、**perfektivisch** (完了的)なものが多く、前置詞を伴う目的語に向かって働きかける動作には **imperfektivisch** (不完了的)或いは **durativ** (続行的)なものが多いと言えます。但し、これらの概念はまた別に詳しく説明する必要があり、また必ずしも絶対的ではないから、茲では一寸暗示だけに止めます。(一例を云うと、**lesen** の四格支配には **eine Zeitlang** 「しばらく」などという時間量の副詞を伴うことは不適當ですが、**in** を伴う場合にはそれが可能です。)

以上が先ず四格そのものの有する力学の一般ですが、これらの理屈は、むしろその反対の場合、すなわち目的語が前置詞を要求する場合を明らかにせんが為の準備であることを忘れてはいけません。

準備的な数例

本問題の **an** に就いては次項で述べる筈ですが、本項ではただ **lesen** 一語だけを捉えて述べたから、具体的にはどんな例があるかをもう少し暗示して置きましょう。

1. 彼がボタンを押すと昇降器が昇って来た。

Er drückte [**den Knopf** ではなくて] **auf den Knopf**, da kam der Fahrstuhl herauf.

2. 彼は馬の頸を叩き、同時に舌を鳴らした。

Er klopfte dem Pferd [此の際は **auf den** より寧ろ] **den Hals** und schnalzte [**die Zunge** ではなくて] **mit der Zunge**.

3. 彼はウイスキーを一本仕入れて、妻君に内緒でそれを飲む。

Er beschafft sich eine Flasche Whisky und trinkt hinter dem Rücken seiner Frau davon.

(ウイスキーを四格で受けて *trinkt ihn* 又は *genießt ihn* 等は不可。ウイスキーはとても一時にそんなには飲めない。)

以上は、目的語が四格になるか前置詞になるかが如何に厄介な問題であるかというほんの一例です。次にこの問題に関して愈々 *an* の場合の難点を詳解したいと思います。

[II]

以上に述べた如く、四格の補足語を要求する動詞は、とかく意味の重点を補足語の方に奪われ勝ちであるが故に、意味の重点を動詞自身の内部に保持させようと云う要求が具体的な形を取るといふと、所謂動詞の前置詞支配なる現象になって来るのです。

ziehen, zerren, rütteln 等と an

そう云う場合の最も奇異なるものの一つは「部分的処理完成の *an*」ですが、それを述べる前に、それに一寸似た「具体的接触を示す *an*」を例示して置きます。たとえば、訪問に行つてベルの緒を引くのは、*Man zieht die Schnur* ではなく、*Man zieht an der Schnur* です。引く (*ziehen*) ぐいと引っ張る (*reißen*) ぐいぐい引っ張る (*zerren*) 一寸引っ張る (*zupfen*) 磨く (*polieren*) 擦る (*reiben*) 揺する (*rütteln, schütteln*) 撞[つ]く (*stoßen*) 叩く (*klopfen*) 等、とにかく「物体の表面に接触してなされる動作」には凡て *an* が用いられる。*stoßen, klopfen* は勿論 *an* と四格が主ですが、他は凡て *an* と三格です。

文 例

1. Die arbeitenden Massen *rütteln an* ihren Fesseln und schreien nach Befreiung.
労働大衆は其の桎梏を揺すぶって解放を求めて叫ぶ。
2. Die gnädige Frau *zupft am* Ärmel ihres Herrn Gemahls und macht ihn auf den hochprimafeinen Gürtel aufmerksam.
奥様は旦那様の袖を一寸引っ張って、飛びっ切り上等の帯に対して注意を喚起する。
3. Der Pilot *riss gewaltig an* der Lenkstange und die Maschine raste wie abstürzend hinunter.
操縦者は、グイと操縦桿を引っ張った、すると飛行機は墜落するかの如くに爆音勇ましく下降した。
4. Der Hund *zerrt an* seiner Kette, springt hoch, geifert und schnappt.
犬は鎖をグイグイと引っ張り、高く飛び上がり、涎を垂れ、口を開けて喘いだ。
5. "Mit Verlaub", sprach der Alte und *rückte an* seiner Mütze, "Ist hier in der Nähe eine Haltestelle?"
<ごめん下さいまし>と老人は云って一寸帽子をずらした。<此の辺りに停留場がございますかしら?>
6. Das ist natürlich ein ganz gemeines Holz, aber ich habe bald zwanzig Jahre mit trockenen Lappen *daran poliert*, mein Lieber.
木は勿論碌な木じゃないけれど、これでもわたしがこれで彼是二十年間もカラ拭き布を掛けて来たんだからねえおまえ。

第六の場合などは、辞書では或いは純他動詞で四格支配の如くなっているかも知れないが、日本の家屋に起こるこうした現象を忠実にドイツ語で云おうとすると、此の *an* を用いなければならなくなるでしょう。

部分的処理完成の an

此の最後の場合の *an* の用法が発展すると、なんでも「少しずつコチコチと働き掛ける」、すなわち、物体の方を主にして考えると、動作が一時にその物体の全部に向かつてなされるのではなく、時と共に段々と完成して行く様な或種の目的に向かつてなされる動作、或いは部分的に働き掛ける様な動作には *an* 支配が好んで用いられるという事

になります。極く普通の例は *malen*, *arbeiten* 等で、「彼はどうせ見込みのない絵をコチコチと仕上げている」は *Er arbeitet (又は malt) an seinem ohnehin aussichtlosen Gemälde* でしょう。もし *Gemälde* を四格にすれば、*bearbeitet* 等にしなければなりません。---- 次の例は訳語とよく照らし合わせて研究して頂きたい。

文 例

1. *Der Bube schnitzte an dem Propeller seines Modell-Flugzeugs.*
少年は自分の模型飛行機のプロペラーを削っていた。
2. *An den Wissenschaften, die wir heute besitzen, haben seit bald drei Jahrtausenden unzählige Menschen gearbeitet.*
吾人が今日所有する諸学問は、かれこれ三千年此の方無数の人達が寄ってたかって完成してきたものである。
3. *Es lässt sich nichts an dem ändern und modeln, was wir einmal festgesetzt haben.*
我々が一旦斯うと決めた事柄は、毫末も之れを変更することを許さぬ。
4. *Ägyptische Sklaven bauten ohne Maschinen jahrzehntelang an ihren Pyramiden, europäische Arbeiter schufteten mit Maschinen jahrzehntelang an ihrem Privatvermögen.*
エジプトの奴隷は機械もなしに数十年の間彼等の金字塔をせっせと築き上げた、ヨーロッパの労働者は機械で以て何十年か掛かってせっせと彼等の私有財産を造り上げる。
5. *Das Fräulein schafft (= stricht) noch immer an ihrem langweiligen Strumpf.*
お嬢さまはまだ倦きもせず例の退屈な靴下を編んでいらっしゃる。
6. *Ich habe an meinem Manuskripte noch einiges auszubessern.*
僕の原稿にはまだ少しばかり修正を加えなければならないところがあります。
7. *An alten Häusern und alten Weibern gibt's immer was zu flicken.*
古い家と婆とは時々手を入れないといけない所が起り勝ちだ。
8. *Das neue Haus steht dicht vor der Vollendung. Gegenwärtig wird noch an seiner inneren Ausstattung gebastelt.*
新家屋は竣成に近い。目下室内の方をあちこちといじくっている。
9. *Er ist abgebaut worden, aber trotzdem schreibt er weiter an seinem Roman.*
彼は首になった、それでもなお彼の小説を書き続けている。
10. *Wir wollen stark Getränke schlürfen ; nun braut mir unverzüglich dran !*
(Goethe ; Faust)
我ら強烈なる飲料を過まんと欲す、いざ逸早くそを醸造せよ。

けれども、以上の例を覚えた後に、何でも *arbeiten*, *schaffen*, *bauen* 等と共に用いる *an* が凡て此の *an* だと思っではいけません。たとえばこんな諺があります----

*Wer an der Straße baut,
muss die Leute reden lassen.*

これは *Straßenbau* (道路工事) をするの意の (即ち此の稿で研究中の) *an der Straße bauen* ではなく、これは文字通り「街道に沿うた所で」です。つまり、裏町で建築すれば人目にはつかぬが、人目に触れる所で家を建てると、まるで競進会に出した様なもので、世間の下馬評が耳に入るのは覚悟の上でなくてはならぬと云う事です。*an der Straße bauen* に、斯くの如く二つの意味が生ずるのを見ても、此の *an* の意味はすこぶる明瞭になるでしょう。

[III]

zu 不定形 + *haben* と共に用いる場合

前まで述べたところで、「部分的処理完成の *an*」の微妙な機能は略明らかにされた事と思います。中心点をどうしても掴む事のできない人は、前項に上げた文例をよく読んで、その *an* の共通な点が何処にあるかを研究した後に説明の方をもう一度読み直して下さい。

最後に、やはり同じ此の *an* の用法には違いないが、「*haben* と *zu* 不定形」の形式を以て用いられる場合が一つのハッキリした一形態をなしていますから、これを特に一項目

として研究して置こうとおもいます。(前項文例 6. 参照)。

たとえば斯う云う場合です。旦那様と奥様とが買物を遊ばす。というよりはむしろ、買物は奥様だけが遊ばすので、旦那様の方はただ子供を抱いてついて歩くのと金を出すのだけが仕事だから割合楽でしょう。ところが奥様は、重い子供を抱いている旦那様に向かって、その上おまけに大きな包みを持ってと仰せになる。すると旦那様は、恐らく---

Ich habe schon genug an dem Kinde zu tragen.....und nun auch noch die Pakete?

「子供だけでももう相当持ちであるのに.....その上おまけに荷物まで持てと云うのか？」

と云うでしょう。此の際に「でがある」という其の「で」を表現するために是非とも必要な此の **an** は、一たいどう云う **an** でしょう？

日本語の「で」が何の型に当てはまる「で」であるかは寡聞にして未だ専門家の意見に接する機会を持ちませんが、当然か偶然か、不思議にも此の **an** が次の様な場合にも丁度日本語の「で」にあてはまるのです。

1. **An einer Flasche habe ich schon genug.**

僕は一本「で」たくさんです。

2. **Wer einkauft, hat hundert Augen nötig, wer verkauft, hat an einem genug.**

買う者は百の眼を要し、売る者は一つの眼「で」沢山。

これは **genug haben** という熟語ですが、**an** は明らかに前述の **an** であり、「で」もヒョツとしたら前述の「で」ではないでしょうか？不思議な「で」ですね。

此の **an** は何でしょう？

前置詞の各種用法の間には、極く自然な移り変わりがあり、中間現象があり、混合現象があります。次に述べる **zu** 不定形 + **haben** と共に用いる **an** がそれで、此の稿の **Thema** である「部分的処理完成の **an**」が、「内容を示す **an**」と共に、**zu** 不定形 + **haben** と共に用いられて、殆ど区別しがたい程の同一型になって行くところに眼をとめて頂きたい。

文例を主にして、細かい説明は止して置きますが、とにかく **tragen**, **schleppen** 等の動詞の意味でもわかる通り、とにかく何か「急に片附かない物」を「荷厄介」にして、多少「その始末に困る」という事態を伴うのが此の型の特徴です。

実を云うと、此の型を理解し、その細かい意味を捉えるためには、抑々 **zu** 不定形 + **haben** なる形式が如何なる意味を有するかと云う知識が前提になるから、其の点の危ない人たちは文法の「**zu** を伴う不定形と **haben**」を参照して頂きたい。そうしないと、たとえば前項 6. の **haben** と、只今の諸例の関係が充分わかるまいと思います。

文 例

1. **Das böse Gewissen ist wie eine Last, an der man eine Zeitlang keuchend zu schleppen hat.**

良心の呵責と云うやつは、謂わば、暫くの間青息吐息で担[かつ]いで歩かなければならぬ重荷のようなものである。

2. **An diesem scheinbar unverdaulichen "an" werden die meisten Deutschstudierenden noch lange genug zu würdigen haben.**

此の一見消化しがたく見える **an** という奴には、大抵のドイツ語研究者は今後といえどもなおしばらくの間は、喉に引っかけて眼を白黒しななければならないであろう。

3. **Gut, gut. Und wir haben ihnen eins angerichtet, dran sie vierzehn Tage werden zu löschen haben.**

よしよし、わかった。あの通り一いたずらして来たからな、消すのにやあどうしたって二週間はたっぷり掛かるだろうぜ。

4. -- **ich sage dir, ich hab' aus dem Kloster mehr denn tausend Taler Werts geschleift, und den Spaß obendrein, und meine Kerls haben ihnen [= den Nonnen] ein Andenken hinterlassen, sie werden ihre neun Monate dran zu schleppen haben.**

(Schiller, Die Räuber)

何だぞ手めえ、その尼寺から担ぎ出したのが今日にしても千ターレルは下るめえと云う大した仕事だ、ついでにお楽しみまで附録に附いてやがらあ、だって手めえ、

手下の野郎どもがみんなそれぞれ尼さん達に置き土産を残して来やがったんだ、これから先九ヶ月はどうしても持ち歩かねえ訳に行かねえような置き土産をさ。

5.Wie ehemals, wo die armen Leute *an* den alten Schulbrotkrusten ihrer Jugend später noch lange zu *knuspern* hatten. (Heine, *Geständnisse*)

[註 Schulbrotkrusten は暗に「古典時代の文豪」を指す]

一度若い時に学校で習った事のある七むつかしい古典の断片をまるでパンの皮でも噛みしめるように、その後もずっと噛みしめて味のあった往時の如くに.....。

以上はかなりむつかしい文例ばかりですから、werden Sie, liebe Leser, an dieser harten Nuss noch eine ganze Winternacht zu knacken haben. (読者諸君は此の固い胡桃に歯を立てて、冬の夜長をまる一夜、かなり噛みでがございましょう。)と云うわけ。

haben なく用いる schwer an tragen

上の如き意味に於いては、zu と haben がなくても、schwer 等の副詞を伴って tragen を用います。

1. Auch Goethe *trug schwer an* der deutschen Sprache.

ゲーテすらもドイツ語にはかなり手を焼いた。

2. Im Dunkeln nämlich *trägt man schwer an* der Zeit, als im Lichte. (Nietzsche, *Zarathustra*)

すなわち、明るみにあるよりは、暗がりにある方が人生を持てあますによってなり。

[Mädchen in Uniform (征服の処女)という Tonfilm が一時大変な人気で迎えられた事がありますが、その一番最後のせりふ、即ち、Frl. Bernburg が校長に向かって云う次の言葉は、恐らくは御記憶の方があります。]

3. Wir wollen Gott danken, Frau Oberin : Die Kinder haben ein Unglück verhütet, woran wir beide unser Leben lang getragen hätten.

校長先生、大変な事になるところでしたよ。生徒たちがいましたから幸い無事にすんだようなものの、そうでなかったらお互いに一生寝ざめが悪かったかも知れませんよ。

IV

附帯描写の mit 又は in

[I]

茲に述べんとする意味形態の大体的見当を先ず印象的に把握せんが為に、次のような文句を熟読翫味し、beherzigen (拳々服膺[けんけんふくよう])して頂きたい。

Ich bin kein ausgeklügelt Buch,

Ich bin ein Mensch *mit* seinem Widerspruch.

わたしは理詰めでこね上げた本とはわけがちがいます、
わたしはつまり人間で、齟齬も矛盾もございませぬ。

これは Meyer の "Huttens letzte Tage" の中の "Homo sum" の終句 (Das heißt : の二語を省きました) ですが、それと、次に挙げる Faust の中の句とを比較して in, mit の意味を考えて下さい。

Ein guter Mensch *in* seinem dunklen Drange

Ist sich des rechten Weges wohl bewusst.

真人は其の混沌たる努力本能の裡にも正道を過たず。

訳は勿論、精神を伝えんがための思い切った意識ですから、そのつもりで、訳語に惑

わされないように、ハッキリと *in seinem dunklen Drange* の句の此の文内に置ける機能を見極めて下さい。

両者には確かに、意味形態として、何処か一脈の相通ずるものがあります。第一の例の *mit* を *in* に変えて意味は大してかわらず、此の *Faust* の引用句も、*in* の代わりに *mit* を置いても、まあ大した感じの差は無いのです。

直前の名刺を受ける物主形容詞に注意せよ

此の両方の句に於いて、何処か共通なところがあります。句の意味形態が共通なのは、これはむしろ「感じ」で把握するの外はないが、単なる意味形態ではなく、文字として具体的に現われた証拠は何かと云うに、*mit seinem Widerspruch* の *seinem* と、*in seinem dunklen Drange* の *seinem* とです。これらの *seinem* は、しかも、両方とも直前の主語を受けています。(主語とは限らないで、時には四格のこともあります、それは後になって例で証明します)---- 此の二つの点が非常に重要です。これを定義として述べると

-
- [1] 附帯描写の *mit*, *in* は大抵の場合物主形容詞をその次に伴う。
 - [2] その物主代名詞は、必ず直前の名詞(或いは近い名詞)を受けるものでなければならない。

名詞附加的 (adnominal) と動詞附加的 (adverbal)

前の二つの例に就いて、なおもう一つ観察しなければならない事があります。それは、*Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange ist sich des rechten Weges wohl bewusst* に於ける *ist* の位置です。この文は、あたりまえの語順の独立文章であるために、主語が第一位に来てその次に動詞の「定形」(verbum finitum) が来るべき筈です。然るに、何故 *Ein guter Mensch ist in seinem dunklen Drange* 云々となっていないか？詩文だから順序は無茶苦茶だ、いわゆる *poetische Freiheit* だ、とは云われません。如何となれば、これは成程詩文ではありますが、ドイツ語の正しい感じに従えば、この儘が詩文であっても一向差し支えはないのです。----要するに *ist* より前が主語であるが故に、此の文の主語は単に *Ein guter Mensch* だけでは無く、*Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange* の全部を主語と見る可きです。----こう云う場合の *in seinem dunklen Drange* を、*Ein guter Mensch ist in seinem dunklen Drange.....* の場合の *in seinem dunklen Drange* から区別するために、前者を *adnominal* (名詞に附加される形、又は、名詞を修飾する句) であると謂い、後者を *adverbal* (動詞に附く形、又は動詞を修飾規定する句) と云います。これは文章論を論ずる時の最も重要な概念であって、この二つの考え方を区別するように慣らさないというと、文法の根本問題が説明できません。

一寸注意しておきますが、*adverbal* という術語 (*ad-* は「附加」*verb-* は「動詞」の意) と *adverbial* (副詞的) という術語とを混同しないようにして頂きたい。両者は全然別物です。

一たい、此の *adverbal* と *adnominal* とは、前置詞を伴う凡ての句に就いて適用されるべきであって、前置詞には凡て此の二つの場合があるのです。

上述の見地から前の二つの文例を観察するというと、*Faust* の引用句の方は、只今述べた如く、*ist* の位置(というよりはむしろ *in seinem dunklen Drange* の位置)に依って、明らかに *adnominal* な句ですが、さて次に、第一例の *mit seinem Widerspruch* の方はどうでしょう？----これを判断するには多少こまかい文章論を説明しないと駄目ですが、一言を以て断ずると、此の場合の *mit seinem Widerspruch* も、やはり *adnominal* です。すなわち「その齟齬を備えたる人間」であって、「その齟齬を以て私は一人の人間である」ではない。もし後の方であるとしたら、*seinem* ではいけない。*meinem* でなければなりません。のみならず、語順の方でも、正しい語順で行くとすれば *Ich bin mit meinem Widerspruch ein Mensch* です。但し、此の後の方の説明は必ずしも絶対的には通用しません。

要するに、前の例は、二つとも *adnominal* な用法です。----其処で(これは必ずしも絶対的ではなく、そうでない場合もかなり多いが、まず斯う云う風に云った方が附帯描

写の **mit**, **in** の特徴がハッキリするから、順序として斯う云おうと思ふのですが) 次のような第三の点が重要になって来ます。

[3] 附帯描写の **mit**, **in** で導かれる句は、大抵の場合名詞附加的なるを以て特徴とする。 (「大抵」で、「必ず」ではない)

mit は **samt**, **mitsamt**, **nebst** にして、全体と附帯現象とを「一括する」意味なり

今までののは単なる準備的考察であってこれから愈々現象の本質に乗り込んで、まず **mit** の方から始めて、此の「附帯描写の **mit**」の微妙な意味形態を捉えなければなりません。

一寸断って置きますが、こんどは、此の前置詞の性質上、いつものように短い纏まった文例に終始することは一寸困難です。何故というに、此の **mit** は、実際としては、大抵の場合、形容沢山な抒情文とか、とにかく何か長ったらしい形容が行われる時に限って現われて来るものだからです。まず一つの文例を以て其の一端を紹介することにします。

Die Zeit mit ihrer politischen Zerrissenheit und leidenschaftlichen Parteipolitik trägt vielfach die Schuld an dem Verfall der Wissenschaften und Künste.

現代と其の政治的分裂・狂熱的党派政策は往々にして
学問芸術の衰退の因となる。

時代 (*Zeit*) というのは、勿論刻下の時代とか時代遅れとか云う場合の時代です。上文中の *Die Zeit mit ihrer* 云々は、*ihre* が直ちに *Zeit* を受けているのを見てもわかる如く、丁度只今述べている附帯描写の **mit** の典型的な場合に相当しますが、此の場合、*Zeit* なる「主体」と *politische Zerrissenheit* 及び *leidenschaftliche Parteipolitik* なる二個の副概念との間の関係をよく考えて見ると、「附帯描写の **mit**」なる名称を用いたわけがよく解ると思います。即ち、*die Zeit* なる概念を、単なる「時」と考えずに、前に一言した如き、或種の特殊な色彩を持った *Zeit* と考えれば、本当は **mit** 以下の長ったらしい形容が無くても、それらの事柄はすべて此の *Zeit* の一語の中に暗に (*implicite*) 含まれているのです。けれども、*Die Zeit* 一語のみを以て、その中にゴヤゴヤと含まれている党派運動や、闘争や、ジャーナリズムや、ベースボールや、エロや、グロなどを、一言不可説的にパッと感じろと云うのは.....或る場合には一寸無理です。*Zeit* は、勿論それら凡ての内容を必然的に想わせるものかも知れないが、筆者としては、やはりハッキリとその一斑を描写したくなるでしょう。即ち *Zeit* の中に *implicite* (暗に) 含まれているところのものを、念のために *explicite* (特に、露わに)----或いは *ausdrücklich* (言葉に出して)----云いたくなります。そういう時に用いられるのが此の **mit** です。上例に於いても、**mit** の次に、茲では二つだけしか名詞がないが、謂わばその外にいくら並べたって構わないのです。つまり *usw.*, *usw.*.....と云う気持です。

必ずしも *usw.*, *usw.* ではなく、特に一つの性質だけを強調する場合もあるにはありますが、此の **mit** を最も純粹に表わすのは *usw.*, *usw.* の意味の場合だと云えましょう。

それから、この **mit** は、時とすると、----主体と副体とを一括する意味で----**samt** (.....云々「とも」) **mitsamt** (云々「もろとも」) **nebst** (.....云々「ぐるみ」) で云い代えられます。その際は、主体とその内容(又は性質、附帯的事実、「付きもの」)との間に大した区別を認めず、謂わばまあ邪魔くさそうに数個の概念を一括して、どれが主でどれが副だとも決めないで、とにかく「そう云ったようなもの凡てが」と云ったような意味に用いることがあります。此の **samt**, **mitsamt**, **nebst** で換置されるという点が、多少極端な場合のみに通用する観察ではありますが、此の **mit** の意味形態を最も明らかに暗示していると思います。

[II]

前項で一般的説明は尽きましたから、次に二三、*adnominal* な場合の附帯描写の **mit** の実例を羅列して見ましょう。

1. Auch die Technik mit ihrer großen Bedeutung für das Wohlergehen der Nation und ihrem Nachwuchs Problem, welches nur im Rahmen der Erziehungsreform und Arbeitspolitik zu behandeln ist, soll bei jeder Programmaufstellung Berücksichtigung finden.

技術は国民の福祉に重大な意義を持ち、また後進養成の問題というものがあって、これはどうしても教育制度の改革と労働政策との框[かまち]内において取り扱うべきものであるから、いやしくも政綱を建てるときには技術というものに対しても考慮が加えられる必要がある。

2. Der Hegelsche Rationalismus mit seinen sich spaltenden und entwickelnden Ideen ist ebenfalls in seinem innersten Wesen deutsch, d. h. dynamistisch und aktivistisch.

観念の分裂と発展を説くヘーゲルの唯理主義も亦、その根本的本質に於いてドイツ的である、すなわち動的、且つ行動主義的である。

3. Die Bäume und Gesträuche mit ihren edlen Früchten, vor allem der Ölbaum, der üppige Pflanzenwuchs mit seinen malerischen Bildungen sind der Segen und der Stolz des Landes.

草木並びに其の貴重な果実、殊にオリーブ樹、画に描いたような美しい形をした諸々の植物の豊かな繁茂、これが此の国の祝福でもあり矜[ほこ]りでもあるのである。

4. Er ist von jeglichem wahren Lebensglück ausgeschlossen und zu einer ewig kalten Einsamkeit samt ihren hysterischen Folgen verurteilt.

彼はもはや凡ゆる真の人生の幸福を見失い、永遠に寒冷なる孤独と其のヒステリカルな結果に囚[とら]えられてしまっている。

次に、adverbial な場合を挙げます。或種の場合には、adnominal とも解せられないのではない事もありますが、どちらにも解せられる場合はむしろ adverbial と解す可きです。

1. Voltaire ist mit seiner historischen Kontrolle ganz unleidlich. Wenn er doch lieber die Data in seiner allgemeinen Weltgeschichte dafür verifizieren wollte !

[Lessing, *Hamburgische Dramaturgie*]

ヴォルテール氏の歴史に関するお目附役振りだけは閉口である。それよりはむしろ御自身の世界史の基礎をなしている史実が本当に史実であるかどうかをお調べになってはどうかと思う。

2. Das Hauptgebäude glich mit seinen grünen Läden und weißen Wänden gewissen Landschlössern, wie man sie in Frankreich findet.

母屋の方は、窓が緑色、壁が真っ白で、まるで仏国あたりの田舎屋敷のようであった。

3. Der Streik, der ihm bisher eigentlich immer noch mit all seiner Begeisterung, seinen Fahnen und Siegesfeiern als etwas sehr Lustiges erschienen war, zeigte ihm zum erstenmal sein ernstes Angesicht.

罷業というやつは、非常に気持が亢奮して旗を立てたり勝利を祝ったりして、とにかくまだ彼にとっては正直なところ何か斯う非常に面白いものであるかのように思われていたのであったが、彼は此の時遂に其の真剣な一面を正視させられたのであった。

4. Wenn man die Geschichte der Menschheit betrachtet, so ist sie keine logische Entwicklung, wohl aber erinnert sie mit ihren plötzlichen Eingebungen, deren Sinn sich erst nachträglich

herausstellt, viel eher an ein dichterisches Erzeugnis.

人類史を観察すると、それは決して理路整然たる進展ではなく、時々だしぬけにパッと何か思い付く、そしてその意義がかなり後になって遅れ馳せにわかってくる、と云ったような点は、むしろ文学作品を想わせるものがある。

代名詞の附帯描写の mit は主として adverbial.

茲に一つ注意しなければならないのは、代名詞につく際です。多少の異例はあるが、そういう場合はなるべく adverbial に扱う可きです。それから、代名詞の場合には殊に訳出法に注意しないと mit の勢いが現われません。訳し方には別に一定の型を設ける必要はありません。その時々工夫に従って、ごく自由に訳出すべきです。

1. Er ist ein ehrlicher Kanak, aber doch im Grunde ein dummer Teufel mit seinen ewigen Menschheitsideen. [seinen は Teufel ではなく、文頭の Er を受けています！]

あいつは、もちろん誠実な好い人間なんだけど、ああ何時迄も人間性理念がどうの斯うのとばかり云って居るところを以て見ると、本当はどうも少し頭が好くなさそうだ。

2. Sie sind ein seltsamer Mensch mit Ihrer Mischung von Güte und Leichtsinn, von Torheit und Vernunft. [Kotzebue, die beiden Klingsberg]

あなたは、親切なところがあるかと思うと何処か上っ調子だったり、飛拍子もないことをなさるかと思うと案外思慮があつたりして実にどうも変わったお方ですな。

3. Japan ist mit seinem Fujiyama und andern Naturschönheiten recht eigentlich ein Land des Fremdenverkehrs, die fernöstliche Schweiz.

日本は富士山その他の自然美に恵まれていて、ほんとうに観光の国、東亜の瑞西 [スイス]なのである。

4. Er sah mit seinen geraden Beinen und der dunklen Haut sehr hübsch aus.

彼は、脚がシャンと真っすぐで、膚の色が浅黒く、非常に美男子に見えた。

けれども、間投文または多少間投文がかつた文で、附帯性質を特に強く前面に出そうという際には、たとえ代名詞を受ける際と雖も adonominal に用いることがあります。

1. Darum aber, dass Zweiäuglein nicht anders aussah als andere Menschenkinder, konnten es die Schwestern und die Mutter nicht leiden. Sie sprachen zu ihm : "Du mit deinen zwei Augen bist nicht besser als das gemeine Volk, du gehörst nicht zu uns.

[Grimm : Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein]

二つ目坊は様子が普通の人間とちつとも違わないので、姉妹たちや母は大変きらいまして、彼女に向かって申しますには、「おまえは二つ目で世間の有象無象とちつとも違わない、おまえはうちの児じゃない。」

2. Aus meinen Augen, du mit dem Menschengesicht ! [Schiller, Räuber]

其の方の人間面など面白うもないわ、すざり居ろう！

附帯的 mit の強調は、軽蔑、反感、憎悪、滑稽化又は憧憬その他の「感情」を表現する。

以上でもわかる通り、この mit を強調して用いると、或る物の性質に対する気持の反応、反撥を表現することになります。

Ach ! diese Überfahrt von Marseille nach Buenos Aires mit ihren Stunden Arbeit im Kohlenlager ! (いやどうも実に、石炭庫の中で時間ぎめで働かされる此のマルセイユ・ブエノスアイレス間の航海という奴にはまったく閉口したよ！)

従って相手の言葉を反撥的に引用して反感を表現するに用う

たとえば、日本語でも、「なんだ、復興だの何だのと偉そうなことばかりぬかしやがって！」なぞと云うことがある。これを翻訳すると、Mit seinem "Wiederaufleben" und all diesen prunkenden Phraseologien ! 等となります。直接になれば Geh mit deinem.....とか、Zum Henker mit eurem.....とか云うでしょう。

1. "Ich bin ganz Ihrer Meinung, aber....." ---- "Bleiben Sie mir vom Leibe mit Ihrem Aber !"

「僕は勿論貴説に賛成なんですが、然し.....」 ---- 「然しもへつたくれもないじゃないですか！」

2. Moser : "Fühlt ihr die Last der Wahrheit so früh? Ich habe ja noch nichts von Beweisen gesagt. Lasst mich nur erst zu den Beweisen....." Franz : "Schweig, geh' in die Hölle mit deinen Beweisen !" [Schiller, Räuber, V. I]

モーゼル：「早やもう道理の力に押されてお色めきなされますか。わたくしはまだ証明すら申し上げては居りませぬ。さらば其の証明をお聴き下されませい.....」
フランツ：「黙れと申すに！証明など聞く耳持たぬ、とっととうせ居ろう。」

[Ⅲ]

前項までは、mit の場合を主にして述べて来ました。しかし、抑々一番最初に断って置いた通り、これと殆ど同様の意味形態が、或る場合には in を以ても表現されるのです。

in とは云うものの、実を云えば、結局はどんな前置詞でも構わないわけで、たとえば「一人の労働者」と云う代わりに、それに多少の附帯描写を附加したいと思えば、Der Arbeiter an seinem laufenden Band (伝送帯に向かって仕事をしている労働者)などと云うが、馭者ならば der Kutscher auf seinem Bock (馭者台の馭者)などと云うが、これを以て見ると附帯描写には an も auf も、要するに凡ゆる前置詞が考えられるという事になって来るけれども、今茲に取り扱っている mit と in とは、まさかそんな広い意味の附帯描写ではありません。an や auf ほど空間的な関係を明瞭に想わしめるものではないので、空間的關係で表わそうとすると、『ちょっとどう云って好いか解らない』ほど、主体の一部を成している『属性』でなければなりません。具体的な例で云うと、単に『労働者と雖もその一票を行使せざる可からず』と云う代わりに、一寸附帯描写を行わんとして Auch der Arbeiter in seiner Fabrik muss seine Stimme abgeben. と云ったからと云って、その in seiner Fabrik を以て直ちに只今述べている附帯描写の in となすのは、少し本質を漠然たらしめる危険があります。それらは、やはり附帯描写の一部には相違ないが、空間的關係を具体的に前置詞で表わす附帯描写として、前述の der Kutscher auf seinem Bock の auf や、der Arbeiter an seinem laufenden Band の an などと共に、別に取り扱うべきでしょう。(この部類はあまりにも当然な事柄が多いので、系統的且つ完全無欠を矜[ほこ]る前置詞研究でもないので省くことにします)。

以下の文例に於いて特に注目して貰いたいのは、主体を表わす概念と、in によって導かれる名詞との関係が非常に密接で、in 云々の句は、考えようによっては、理由を述べると云ってもよからうし、時には「にも拘わらず」の意になると考えてもよからうし、とにかく文章に従って色々な解釈を許すという点です。また、いずれ述べるであろう所の『局限化的 in』或いは『主観的原因を指す in』などにも近づかんとする傾向を持ったもので、多岐に亘る in の研究は、私もまだこれからだと思っています。

文 例

1. Sie war ganz jung und rührend in ihren schwellenden Rundungen.

彼女は、如何にも福々しい曲線美に恵まれた女で、とても若々しくて、人々の心をセンチメンタルにした。

2. Von der Ferne betrachtet, waren die Lichter magisch in ihren regelmäßigen Abständen.

遠くから眺めると、それらの燈[ともしび]は、一定の間隔を置いて点[とも]っていて、まるで夢の世界のような感じを与えた。

3. Der Mann, den das Bild darstellte, sah in seinen roten Hosen und breiten Epauletten ein wenig tamburhaft aus.

その画に描いてある男は、赤いズボンに幅広い肩章といういでたちで、ちょっと鼓手めいた恰好に見えた。

4. "Wir kommen, Ihnen in Ihrer Einsamkeit die Zeit kürzen zu helfen," sagten die Abderiten. ---- "Ich pflege in meiner eigenen Gesellschaft sehr kurze Zeit zu haben," sagte Demokritus. [Wieland, Die Abderiten.]

『あなたは、見たところ一向お話相手もおありにならないようですから、少しでもお退屈凌ぎにでもなればと思って出掛けて参りました』とアブデラ市の人達は云った。
---- 『私は、話し相手といえれば自分一人が話し相手ですが、退屈はもう充分しのげて居ります』とデモクリトスは云った。

5. Die bisherige Methodologie hat sich bemüht, die Kunstregeln des Denkens in ihrer Vollständigkeit zu sammeln und systematisch zu verarbeiten.. Nicht so bei vorliegendem Werke.

従来の方法論は、思惟の定則を網羅する如く蒐集し、それに系統的な加工を施こさんと努めて来た。本書はちがう。

6. Auf ihn machte diese Mitteilung in ihrer Einfachheit einen tiefen Eindruck.

この報告は、頗るあっさりしていて、彼にはとにかく非常に深い印象を与えた。

7. Aber das hat in seiner mehr äußerlichen Art nicht mehr genutzt, als wenn man auf einen geplatzten Autoreifen ein Stück Fahrradschlauch aufgepappt.

しかし、そんな事は、どっちかと云えばむしろ極く皮相なやり方で、たとえばパンクした自動車のタイヤに持って来て、自転車のゴム輪を貼りつけたより以上の効き目は見えなかった。

先にも強調した如く、茲で取り扱った附帯描写の in の次に置かれる名詞は、大抵の場合、『属性』『性質』を現わす抽象名詞であって、且つ 6, 7 の例でもわかる如く、多少理由を述べる (wegen に近し) 場合が多いと言えます。第三番のは、一例として「衣服」の場合を挙げたのですが、「衣服」の in は、これはまた改めて別に扱う可きもので、それが附帯描写である限りに於いて此の部類にあてはまるのです。

此の種類 in には、なお in seinem Zorn (怒って) とか in seiner Blindheit (めくら滅法に) とか云う、一時的な性質を指しつつ、「行動の原因」を指す形態があり、その他にも尚細かい階梯をなして其の他の型に連絡しています。しかし、諸種の形態の間の境界が多少 fließend であるからと云って、その各々の形態の本質までが曖昧に考えられるべきものではありません。少し methodologisch な事柄に亘りますが、研究の途中で一寸反省の必要を感じたから述べた次第です。

V
『仕打ち』の an

例 文

Du sollst deinen Unwillen nicht an einem unschuldigen
Dritten auslassen. (an einen は誤り！)

不平ありとて、罪なき局外漢に当たり散らすはよろしからず。

『仕打ち』の an は、特に顕著な、且つ孤立的な、且つ比較的把捉し易い意味形態であるが故に、ただ文例を二三並べたきりでも充分に本質の輪廓は浮かび出ます。ただ、此の形態は、前項までに述べて来た mit, in とは違って、その伴う動詞の意味が略一定しています。形式文法では、単に an を支配する動詞として、an そのものに対しては何の考察も向けられていない様に見受けませんが、度々宣言して来た通り、前置詞研究は、動詞の前置詞支配なる現象をば、逆に、前置詞の意味形態を明瞭に把捉することによって段々と系統付けて始めて真の研究たり得るのです。その方法は、極くわかり易く云えば Typologie(類型論)と名づけることも出来ましょう。

「仕打ち」の an の意味形態を把捉するためには、これを「宛てる」の an と比較して見ると忽ちわかります。即ち「宛てる」の意の an は四格支配ですが、「仕打ち」の an は三格支配です。既に formell-morphologisch(形式的)にも両者がはっきりと分かれるわけです。たとえば---

1. Er richtete seine Proteste an die Obrigkeit.
彼はその抗議を当局に向けた。
2. Er wandte sich an seinen früheren Amtskollegen.
彼は以前の同僚にすぎった。
3. Ein Trostgeschenk Gottes an die Menschheit ist die Kunst.
芸術は神が人間に与えた慰安の贈り物である。
4. Noch hat er nicht an mich geschrieben.
まだ只今のところ彼は私のところへ手紙を寄越していない。

これらは、(即ち richten「向ける」 schreiben「手紙をやる」 sich wenden「すぎる」「訴える」等、schenken「贈る」---その他、「宛てる」の意の動詞はすべて「人」の四格と an とを支配する)すべて四格支配の an であって、劈頭[へきとう]の an einem seinen Unwillen auslassen(或る人に対して己が不満を放つ、尻を持って行く)という際の an と非常に似ているようで、実は形態が全然別です。形式上の形態が三格四格の相違を示しているのみならず、意味形態が全然別なのです。此の点をはっきりと境界づける事が直ちに以て「仕打ち」の an の本質を明らかにすることになるでしょう。

では、早速、「仕打ち」の an を支配する主な動詞を述べて見ましょう。斯うした意味形態を把捉するには、それに伴う主要な動詞を覚えてしまう事が是非とも必要で、或る範囲の具体的な動詞を離れては考えられません。(動詞という以上は、その動詞に関係のある nomen actionis「動作名詞」も共に含まれることは勿論です)。

- | | |
|---|------------------|
| 1. so oder so an einem handeln. | 或る人に斯く斯くの仕打ちをする。 |
| 2. sich an einem rächen. | 或る人に復讐する。 |
| 3. sich an einer Sache versündigen. | 或る事を流[けが]す。 |
| 4. an einem treulos werden. | 或る人を裏切る。 |
| 5. sich an einem vergreifen. | 或る人に暴行を加える。 |
| 6. an einem Revanche (od. Rache) nehmen | 或る人に仕返しをする。 |
| 7. an einem Großmut üben. | 或る人に対して寛大な態度を取る。 |

以上の例では、「誰それに対して」という「対して」の an が凡て三格になっていることがわかると同時に、動詞そのものに、前述の「誰それ宛てて」の際とは根本的に違

った、一定の意味形態があることが明らかになります。私は特に意味「形態」と言います。如何となれば、たとえば「復讐する」と「寛大な態度を取る」との間には、意味の共通点はちっともない、むしろ意味は反対です。ところが、復讐するにしろ、怒[ゆる]すにしろ、とにかくそれが一人の人間に対する「仕打ち」であることは似ています。好い「仕打ち」であるにせよ、悪い「仕打ち」であるにせよ、とにかく茲では一人の人間が他の人間から或種の「仕打ち」を「加えられる」のです。「蒙る」のです。手紙を受け取ったり、ものを貰ったり、話を聞いたりするのは非常な相違です。其処には倫理的な色彩があります。

此の「仕打ち」の an が、必ずしも形式的に動詞の支配から生ずるものではなく、むしろ逆に、an にそうした意味形態があるが為に sich rächen その他が此の an を「支配」するのだと考えなければならないと云う事は、たとえば或種のアイマイな用法が之れを証しています。

Fort, Bursche ! Sorge, dass du Genua auf den Rücken kriegst, man könnte seinen Mut an dir retten wollen. [Schiller, Die Verschwörung des Fiesco zu Genus, Akt 4 Szene 8]

此の下線を施したところが、この儘で直ぐに想像でもついたら、その人の語学力は大したものです。或いは説明をしたところで、此の「仕打ち」の an という形態がはっきりと意識されていなければ、結局「全体の意味」がわかるきりで、本当には納得できないでしょう。そうかと云って、retten と云う動詞に an 支配を求めたって、そんなものが辞書にあるわけのものではありません。seinen Mut an einem retten なんて熟語はありません。また、無い筈で、これは此の場合 Schiller が臨機応変にこうした結合を試みたに過ぎない。勝手な結合を試みる時には、必ず Typologie 乃至 Analogie というものが働く。やたらに其の時の気まぐれで勝手放題なものを勝手放題に結びつけるという事は決してしない。必ず何か「似せて」Analogie-Bildung をやる。

無意識に、本能的に結合するのだから、別に「何に似せて造ろう」とか「こうした形にあてはめよう」とか云ったような意識の動きはなかったかも知れない.....と云う人があるかも知れません。けれどもそれはまだ不徹底な考え方です。「無意識にやればこそ」何かの型にあてはまるのです。何の型にもはまらないデタラメを書くためには、むしろ非常に意識して、反省に反省を加えて、「何の型にもはまらない様に」と眼を皿のようにして自分の筆を監視する必要があるでしょう。Schiller は、恐らくはそれ程の語学者ではなかったでしょう。私が今やっている程の分析は其の瞬間は出来なかったでしょう。an の形態なんてものに関する知識は極く不完全だったに違いない。an を用いる以上は必ず an の何等かの形態に属しなければいけないという法則は知らなかった。そして「法則を知らなかったが故に」（「.....にも拘わらず」ではない）法則に範[の]ってしまったのです。

前置詞なんてもものの細かい意味形態は、熟語や成句をなすものにも現われるが、また、こうした「すこぶる危ない、微妙な、臨機応変の用法」に於いて最も明瞭に現われるものです。熟語成句に現われる意味形態は、時には現在ではもはや生きた形態としては語感に存在しないものがありますが、臨機応変に用いる所謂「あいまい」な用法は、それが苟[いやし]くも同国人に理解される限り、必ず何か「生きた」形態に属しているものです。

そこで一つ前にあげた Schiller の場合に帰って考察しましょう。この個所は、話の筋を少し明らかにする必要があるから、それを先ず述べます。少し面倒かも知れないが、聴いて下さい。

Fiesco 伯爵が Genua の領主 Doria の一家に対して叛乱を起こそうとしている。見方の貴族が落ち合って大いに氣勢を上げているところへ持って来て、忽ち『領袖 Fiesco 伯の片腕であった黒人 Hassan が Doria 家に内通したために、計略がすっかり暴露してしまった』という報せが伝わって、叛徒たる貴族達は色を失い、少し滑稽な程動揺を来す。----其処へまた第二の意外なことが生ずる。老公 Doria は、大いに太っ腹を示して、自分の方へ内通してきた黒人を縛[ばく]して、これを叛徒の集まっているところへ送って寄越し、『自分は Fiesco 伯が謀反を企んでいようなどとは信じられない、此の怪しからぬ黒人、よろしく成敗あって然るべし』と伝言する。Fiesco 伯はちょっと度胆を抜かれ

る。いずれにしても黒人を一刀の下に成敗すべきなのであるが、一寸わけがあるので、罵った上でのがしてやる。前の文例は、その時に Fiesco が黒人に向かって云う言葉です。意識をすれば、

『やい、逃げろ！一時も早くゲヌア市には背を向けた方が身の為だぞ。ぐずぐずしていると名誉回復の血祭りに上げられるぞ』。

man könnte seinen Mut an dir retten wollen は、文字通りに云えば man 人々は seinen Mut 己が勇氣[即ち武人の体面という意味の]を an dir おまえを相手取って(おまえを当面の対象にして) retten wollen 救おうと欲する könnte かも知れないぞ。

これはつまり、一時色を失って大騒ぎをした同志たちに対する皮肉です。此の an dir は、たとえば seinen Unwilen an jemandem auslassen というときと同じ an であることは、既にそれが三格支配である点から見ても明瞭です。また seinen Mut retten 即ち詳しく云えば seinen Mut vor den Augen aller (od. vor seinem eigenen Gewissen) retten という句の中には、必ずしも或る人に対する仕打ちらしい何物もないが an dir という an があるだけのことで、何か黒人の身に危害が加えられることが既に表明されて、これをハッキリと殺すとか斬るとか云った際よりも、an 一語で表現されている方がずっと暗示的で、いわゆる「凄味」として感ぜられるのです。

私は、はっきりとした認識に訴えようとして、わざと「あぶなっかしい」幽かな場合を例に取りましたが、その意図は大抵お察しの事でしょう。一見あいまいな場合に限って意味形態の本質はむしろますますはっきりするものです。

以下、諸種の場合の中から、最も典型的な例文を選んで参考にご供して見ます。

文 例

1. Ich bin eine Fremde, Verlassene, und hoffe nicht, dass man hier unedel an mir handeln werde.
妾は他郷の女、寄る辺なき身の上でございますから、当地の方々もあんまりなお仕打ちをなさらない様におねがい致しとう御座います。
2. Zurück, meine Herren, oder ich vergreife mich an Ihnen !
諸君、おとなしく引っ込み給え、出しゃばった真似をすると或いは慮外な失礼を申し上げないとも限らぬぞ。
3. Sich so zu versündigen an einem Menschen, und es kann sein, wer es will !
たとえ相手が何者にしろ、そんな無茶なことをするってえ法があるものか！
4. Aber bedenken Sie, Sie haben nicht nur an sich, sondern auch an der ganzen Mannschaft gefehlt !
然しまあよく考えても見てください、あなたの様な過ちをされては、単にあなた御自身ばかりではない、部員一同が迷惑してしまいますからね。
5. Auch die größten Schriftsteller haben an ihren Vorgängern Plagiat begangen.
最も偉大な文豪と雖[いえど]も各々その先進に対して剽窃の罪を犯しているのだ。
6. Die ewige Vorsehung ließ den Sohn Rache nehmen an dem Mörder des Vaters.
神明の摂理は遂に子をして父の仇を討たしめた。
7. An Unheilbaren soll man nicht Arzt sein wollen. [Nietzsche]
救う可からざる者達を相手に医者たらんとする勿[なか]れ。
8. Ich fürchte jetzt nichts mehr, als dass ich mich an dir vergessen könnte.
おれが此の際一番恐れるのは、おまえのような奴を相手にしていると、自分ながら何を仕出かすかも知れないと云う此の一事だ。
9. Es wäre einfach ein Verbrechen an unseren Kindern, wenn wir uns das gefallen lassen

wollten.

そんな事をされて平気であると云う事は、むしろおれ達の子供達に対して面目ない事だとは思わないか。

10. Dürft ihr von Liebe reden und von Treue, der treulos wird an seinen nächsten Pflichten ?

手近の義理すら欠きながら、愛の実のものもないものじゃ。

[Schiller, *Wilhelm Tell*, III. 2.]

11. Es treibt die Angst sie aus dem Heiligtum, das ist das göttliche Gericht, das sich an ihr verkündet !

さては聖所に居堪らず、血相変えて駆け出でしよな、あな恐ろしや身に顕れし神明の裁き。

[Schiller, *Jungfrau von Orleans*, IV. 9.]

12. Der König schwört, die hinterlist'ge Tat, und wär' es auch an seinem eigenen Kinde, aufs schrecklichste zu ahnden.

王は、此の裏切りを罰する上に置いては、たとえ我が児たりとも一点も仮借する所なからむと誓う。

[Schiller, *Don Carlos*, I. 2.]

13. Der Mohr war über einem Meuchelmord ertappt worden, den er an dem Fiesco vollstrecken sollte.

黒人は指令を受けてフィエスコ伯に対して遂行せんとした暗殺の現場で捕らえられたのであった。

[Schiller, *Fiesco*, II. 14.]

14. Es wurden ausgesuchte peinliche und infamierende Strafen angewendet auf dies zarte Lebensalter, und es verging fast kein Monat ohne eine feierliche Exekution an irgend einem armen Sünder.

幼い者をつかまえて、とても御念の入ったむごたらしい屈辱的な刑罰が加えられ、殆ど毎月の如くそうした仰々しいお仕置きを受けるものが出た。

[Keller, *Der grüne Heinrich*, I. 9.]

15. An euren Kindern sollt ihr gut machen, dass ihr eurer Väter Kinder seid.

汝等が汝等の父祖の子達であるという此の悲しむべき事実を、罪滅ぼしのために、汝等の子達に対する仕打ちに依って翻然改むるを要す。[Nietzsche, *Zarathustra*]

16. Und sprach : Gelobet sei der Herr, der Gott meines Herrn Abraham, der seine Barmherzigkeit und seine Wahrheit nicht verlassen hat an meinem Herrn.

言いけるは、吾が主人アブラハムの神エホバは讚美[ほめたたえ]むべきかな、わが主人に慈恵と真実とを欠きたまわず。

[I. Mose, 24, 27]

VI

『附属対立』の zu

誰でも知っている範囲の熟語で云うと、『あなたはどうお思いになりますか』或いは『それに対するお考えは如何です』という際の Was sagen Sie dazu ? から出立して話しましょう。

此の dazu の zu は一たいどう云う意味の zu でしょうか？『それに対して貴君は何と云うか？』という構造だから、zu は『対して』だと云ってしまえばそれまでですが、日本語の訳語は必ずしも意味形態を判断する際の唯一の基準にはなりません。ドイツ語の包含する数個の意味形態と、それに対立する(何が何に対立するかは第一甚だ疑問ですが)日本語の包含する数個の意味形態とは、たとえば二枚の木の葉の如きものであって、たとえ如何に似て居ようとも、決して完全に掩い合わさるものではありません。---そして「意味形態」は、ドイツ語をも日本語をも離れた第三の存在なのです。

要するに『対して』と云う訳語は、適訳ではあるが、然らば、もっと突っ込んで、どう云う種類の『対して』であるかを突きとめる必要があります。

少し違った方面から、もう一つの例を持って来ると、たとえば Schubert の作曲によって人口に膾炙[かいしゃ]している Wilhelm Müller の連詩 Winterreise に Der Leiermann という詩があります。最後の下線したところに注目して頂きたい。

Der Leiermann

Drüben hinter'm Dorfe
Steht ein Leiermann,
Und mit starren Fingern
Dreht er, was er kann.

Barfuß auf dem Eise
Wankt er hin und her,
Und sein kleiner Teller
Bleibt ihm immer leer.

Keiner mag ihn hören,
Keiner sieht ihn an,
Und die Hunde knurren
Um den alten Mann.

Und er lässt es gehen
Alles, wie es will,
Dreht, und seine Leier
Steht ihm immer still.

Wunderlicher Alter,
Soll ich mit dir gehn ?
Willst zu meinen Liedern
Deine Leier drehn ?

詩人の詩想は最後の二行に集中されている。爺さんよ、おれが唄を作るから、それに合わせて手琴を廻さないか、という意味ですが、此の **zu** が、前述のと何処か一脈の相通ずるところがありはしないでしょうか？

事実、こうした、何かに「合わせて」何かをどうとかする、と云う際には必ず此の種の **zu** を用いるのです。たとえば歌劇は、歌詞と楽譜から成っているが、あるオペラ「の」テキストという際には **Der Text einer Oper** と云えないことはなかりうが、やはり **Der Text zu einer Oper** と云った方が好い。あるトーキーの「ための」音楽等ならばたとえば **Die Musik zum Tonfilm ; die Musik zum Stück** などと云う。同じように、「国際連盟規約の附属書」を **Die Auflage zur Völkerbundsatzung** と云う。

なお、この **zu** の性質を明らかにするのは、**Gegensatz**(対称、対立)という概念と **Gegenteil**(反対)という概念との文法的相違です。たとえば、大は小の **Gegenteil** ですが、それをドイツ語で云おうとすると、**Groß ist das Gegenteil von klein** で、"von"を用いるのが自然ですが、計画経済は自由経済の反対であるという時には、**Gegenteil** よりむしろ **Gegensatz** を用いて、**Planwirtschaft steht im Gegensatz zu freier Wirtschaft** と云った方が好いでしょう。**These** と **Antithese** とが問題になる際なども同様です。

以上の諸種の例を考えて見るに、此の種の **zu** によく慣れない人たちが文を作るときには、うっかりすると二格を用いたり、**von** を用いたりしそうなところに用いられる **zu** であることがわかります。A 君がオペラを作って B 君が「その」歌詞を作る、といったような際には、ともすれば **Herr A komponiert eine Oper und Herr B schreibt ihm dessen Text** (又は **den Text davon**) と云いそうです。これは必ず **den Text dazu** でなければなりま

せん。国際連盟規約附属書も Die Auflage der Völkerbundsatzung ではなく die Auflage zur Völkerbundsatzung です。ゲーテ作ファウストの註訳も、Erläuterung von Goethes Faust ではなく、Erläuterung zu Goethes Faust です。

要するに、曲と歌詞、本文と附属書、ビールとお菜、テーゼとアンチテーゼ、新聞小説と挿絵----その他何でもよろしい、多少たりとも「相關的」な、相対立すると同時に **zusammengehören** するものには此の種の **zu** を用いるのです。附属対立の **zu** と呼んだのは此の理由からです。だいいち **gehören** (属する) という動詞が **zu** と共に用いられるから、それと関係させて考えれば益々明瞭でしょう。

意見の zu

此の **zu** と殆ど同じ意味形態を有しながら、一寸傍系的に発達して来ているのが、最初に述べた **Was sagen Sie dazu ?** の **zu** です。 **Was ist Ihre Meinung zu diesem Vorschlag ?** などとも云えるから、一つの動議とそれに対する意見とは、対立する二つの相関概念として考えられる。この点に於いて只今述べた **zu** と同じです。主に「意見」に関して用いられると云う点で、たしかに別項として取り扱うべきものでしょうが、非常に接近した形態であるから、茲では一緒に述べたわけです。

文 例

1. Sie schneidet Vignetten zu den Büchern, die ihr Mann herausgibt.
彼女は良人が出す書物の巻頭の唐草模様のカットを作っている。
2. Er liefert Zeichnungen zu meiner Zeitschrift.
かれは私の雑誌の挿絵を描いてくれる。
3. Sie liebt es, Halbschuhe und dazu mattfarbene Strümpfe zu tragen.
彼女は夜会靴を穿いて曇色の靴下を見せるのが好きだ。
4. Seine Artikel waren das Gegenstück zu den meisten akademischen Abhandlungen.
かれの記事は大抵の大学臭紛々たる論文に対する好個の対称であった。
5. Professor Lemke war ein hagerer, älterer Herr, der eine Hornbrille zum Frack trug.
レムケ教授というのは、燕尾を着てロイド眼鏡をかけた、痩せぎすの中年紳士であった。
6. Wie schmeckt das ? Und was trinkt man dazu ?
それはどんな味がするか？そして一たい何のツマにするのか？
7. Aber darum gibt es heute auch zu jedem Gedanken einen Gegengedanken und jeder Neigung gleich die entgegengesetzte. [R. Musil, der Mann ohne Eigenschaften S. 345]
だからこそ現今に於いては、何か一つの考えがあれば、必ずそれに対する反対の考えがあり、一つの傾向があれば、亦必ず其の正反対の傾向があるというわけなのである。----(中間現象と見られる)
8. Mancher Stümper hat zu einen schönen Titel eine schlechte Komödie gemacht, und bloß des schönen Titels wegen. [Lessing, Hamburgische Dramaturgie]
題ばかり立派なのをつけて、芝居の内容のなっていない劣悪作者が多い。しかも題が面白いからと云って作るのだから堪らない。
9. (意見の zu) Acht Rechtsgelehrte waren zu dem Thema um ihre Ansicht befragt worden.
此の問題に関して八名の法律学者が意見の開陳を求められた。

10. (意見の zu) In Angora wird zu den Vorgängen in Iran erklärt, dass es sich keineswegs um einen Putsch handele.

土耳其[トルコ]政府はイラン事件に関して該件は決して叛乱に非ずとの声明を發した。

殊に一寸面白いのは、*gute Miene zum bösen Spiel machen* という熟語です。これには二つの用法があって、或る時は「形勢が悪くなくてもたじろいた様は見せぬ」という意に用い、或る時は(この方が元来正しいのですが)「悪いことをしながら、テン然としてすましこむ」の意に用いる。この *zu*こそは確かに今問題になっている *zu* です。この部に属する二三の例を挙げておきましょう。

11. Um hier ganz von den verklappten Egoisten und Parteigängern abzusehen, die zum bösen Spiel, das sie treiben, eine recht objektive Miene machen.

[Nietzsche, *Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben*, VI.]

かなり疾[やま]しいことをやりながら、しかもとても客観的な顔をしてすましている仮装した利己主義者や党派的な奴等は問題の限りに非ずだが。

12. Bosheit hab' ich dulden gelernt, kann dazu lächeln, wenn mein erboster Feind mir mein eigen Herzblut zutrinkt. [Schiller, *Räuber*, I. 2.]

悪いことはいくらされても平気だった。不倶戴天[ふぐたいてん]の仇敵[きゅうてき]がおれ自身の心臓の血を以ておれに向かって乾盃しても、おれはそれを見て微笑んでいることが出来る。

13. Doch einer, seht, ist in dem Schwarme noch, der gute Miene macht zum bösen Spiel : das lust'ge Schneiderlein von Benevent. [Hamerling, *Ahasver in Rom*. I.]

然るに見よ、一座には此の白け渡った局面を洒落でごまかす勇気のある男が一人いた、それはベネヴェント生まれの愛嬌者の仕立屋さんである。

VII

『用向き』を指す auf

「旅行中に」又は「旅先」を *auf der Reise* と云う。「旅行に出掛ける」を *auf die Reise gehen* ; *sich auf die Reise begeben* と云う。此の *auf* は *Reise* の場合のみではなく、もっと一般的な性質を持った一つの型です。三格支配の場合は最後に述べるとして、まず *auf die Reise* の *auf* の方を調べましょう。これは、*gehen, ausgehen, schicken, mitnehmen, ziehen, fahren, reiten* 等、とにかく何か「出向く」「出掛ける」「遣わす」等、「出動」を意味する動詞、或いは「出動」という動作を伴う意味の動詞と共に用いる *auf* で、「何々しに出掛ける」或いは、「出動の目的を指す *auf*」と名づけても好いでしょう。

auf die Reise gehen, auf die Jagt ziehen などの際はかなり判り易いが、*Auf eine Tasse Kaffee hineingehen* (一寸一杯珈琲を飲みに入る)等になると云うと、「用向き」を指す *auf* の意味形態がすっかり輪廓を得ることになります。

用向きの auf の由来

こうした用法の生じた由来は、*auf etwas los* (或る物に「向かって」、或る物を「めがけて」)等の *auf* が、抽象的に用いられて、「目的」の概念を伴うに至ったものとするのが妥当でしょう。*auf dass.....* (*damit* と同意の接続詞)に現われている *auf* の如きが同じ現象です。

文例

1. Wir sind doch nur auf Besuch da.

私達はただ一寸御邪魔に上がっているきりなのですが。

2. Er war nur auf Urlaub in seiner Heimat.
かれはただ休暇を利用して故郷に帰って来ていたに過ぎなかった。
Er geht morgen auf Urlaub.
かれは明日休暇を貰う、帰休する。
3. Ich besuche ihn regelmäßig und nahm ihn auf Spaziergänge mit.
私は規則正しく彼の所へ出掛けて行って、散歩に連れ出した。
4. Morgen geht die Arbeiterkolonne nach Mühlhof auf Retablierung.
明日労働者達は休養の為ミュールホーフに向かう筈。
5. Wollen wir nicht auf ein Glas Bier hineingehen ?
ちょっとビールでも一杯飲みに這入ろうじゃないか。
6. Heute nachmittag will ich dich auf eine Pfeife Tabak besuchen.
今日の午後君のところへ一寸一服吸いに寄るぜ。
7. Er schickte einen seiner Vertrauten auf Botschaften aus.
かれは腹心の一人を使いを差し向けた。
8. Ich zog zuweilen mit ihm auf die Wolfsjagt.
私は時々彼と共に狼狩りに出掛けた。
9. Obwohl er schon nahe den Achzigern war, verließ er den Hof, um abermals aufs Abenteuer auszugehen.
かれは、齢既に八十歳に達せんとしていたに拘わらず、またもや朝廷を去って武者修業にと出掛けた。
10. Die B-29 startet auf einen Erkundigungsflug.
B-29 は偵察飛行に出発する。
11. Kolumbus begab sich auf die Suche nach einen neuen Festlande.
コロンブスは新大陸の発見に出掛けた。
12. Doch keiner meiner Leute, unausgesetzt während drei Tage auf Kundschaft geschickt, war imstande, mir auch nur auf die entfernteste Weise Nachricht davon zu geben.
[Kleist, Michael Kohlhaas.]
三日続け様に部下を斥候に出したがその件に関してたとえ消息の片影だにもたらし得た者は一人もなかった。
13. Ich ging erst auf Wasserabschlag und dann die Treppe hinunter auf die Straße.
僕は先ず小便に行つて、それから階段を降りて表通りに出た。
14. Merkwürdig. Zu meiner Zeit ritt die Kavallerie auf Patrouillendienst eher um zwölf Uhr nachts. [Sudermann, Morituri, Fritzchen.]
そいつはおかしい。わしの時代には、騎兵隊が巡察勤務に出掛けるのは大抵夜中の十二時頃じゃったが喃[なん]。
11. Auf ein Wort, Razmann. [Schiller, Räuber.]
おいラーツマン、一寸一言話がある。
12. Eh will ich mit meiner Geig' auf den Bettel herumziehen, und das Konzert um was Warmes geben. [Schiller, Kabale und Liebe.]

それくらいなら俺はむしろ此のヴァイオリンを持って乞食に出掛け、曲を弾いて暖かい食事にありつく方が本懐だ。

auf を伴う名詞に関する考察

同じ「小便に行く」でも auf Wasserabschlag, auf Pissen ではなく auf den Abort(便所へ)ならば、こんどは auf の意味形態がすっかり別物になって、それは aufs Postamt(郵便局へ) auf den Markt(市場へ)などと同じものになります。----今の問題の auf の次に来る名詞は必ず「出動の用向き」(用便、放水、偵察、訪問、休養、写生、ロケーション、見物、旅行、遊覧、武者修業等々々々)を指す行為名詞(nomen actionis)であるか、それとも、そうした行為名詞の代わりに用いられる具体名詞又は抽象名詞(ein Glas Bier, ein Wort, eine Prise Tabak, etc.)でなければなりません。

三格名詞を伴う場合

以上は凡て四格支配の場合のみで、従って動詞も亦 gehen, schicken, mitnehmen, kommen 又は kommen と同意の da sein, 等であったが、静止の意、即ち、三格支配の場合もあることは auf der Reise (旅行先で)等でも判るでしょう。此の際は「途中」又は「途上」にあることを指すので、従って用向きを指す auf とは本質的に相違して来ます。auf der Reise, auf der Flucht, auf der Suche (nach etwas), 等は用向きの auf と少しも変わらないようだが、auf der Spur (探索中)、auf dem Wege (=unterwegs), auf falscher Fährte (見当がまちがっている)等の auf と同類型になって来ますから、三格支配の場合は別口扱いにした方が好いと思います。

VIII Identitäts- von

日本語でも、たとえば『伊藤の畜生が』どうしたとか、『小使いの野郎が』どうのこうのと云います。此の際の『の』に相当するものが西洋語にもありますが、ドイツ語では、こういう際には Genitiv を用いないで、von を用います。此の形態は、特に仏蘭西語に於いて非常に発達していますから、十七八世紀以前から盛んにドイツ語に影響を与え始め、仏蘭西語の de とドイツ語の von との類似を基礎にして、今日のような、ほとんど意味形態の上で寸分の相違もない共通現象が出来上がってしまったのです。

仏語の *le drôle d'homme* 等 *le drôle de..... la drôle de.....* という成句などは最も普通な現象ですが、其の時々で類造して行く自由な型の例を一つ二つ挙げますと：*C'est ma gredine de jument, figurez-vous, qui a fait un écart au moment où je visais. (Villiers de L'Isle-Adam, Sylvabel.)* 実は丁度私が狙いを定めている時に馬の奴が跳ねたものですからね。---- *Dis donc, Made, te rappelles-tu le jour où ce cornichon de Forestier a prétendu nous prouver que les gros homme étaient plus vigoureux que les maigres ? (Maupassant : Bel-Ami, II. I.)* ねえマドレーヌ、覚えているかい、何時だったか、フォレスティエーのやつめが、痩せぎすの男より肥っちょの方が精力家だなんて変な理屈を捏ねやがったことがあったろう？

Identitäts-von の論理的機構

先ず、此の種の『の』には、論理的文法的機構が一定しています。Dieser Schuft von Schneider (此の仕立屋の畜生が)と云えば、Schuft は Schneider の性質を述べるもの、即ち述語です。dieser nichtwürdige Schneider !とか dieser niederträchtige Schneider !とか云うのと同じことです。即ち、von の前に置かれる名刺は必ず von の次に置かれる名詞に対する述語(客語)でなければならない。----つまり von の元来の機能から考えると、順序が反対であるかのような感じを与えるのです。何故というに、述語ということを考えると、たとえば、eine Frage von aktueller Bedeutung (時事価値のある問題)とか、eine Forschung von großem Umfang (広汎なる研究)とか云ったような、つまり von の『次に』述語的に用いられる概念を持って来る場合が直ぐに考えられるからです。これらの句に

用いられている von と違うのは勿論ですが、述語とその主語とを念頭に置いて考えると、此の二つの形態は、謂わばその論理機構が多少似ていながら順序が全然反対になるという点に注目を要します。それから、von aktueller Bedeutung, von großem Umfang 等の von は、次に来る名詞によると、Genitiv を用いてもよろしいのです (Ein Stamm germanischen Ursprungs ゲルマニヤ系統の民族、Eine Familie jüdischer Herkunft 猶太系統の家柄)が、Identitäts-von は決して Genitiv を以ては云い換えられません。これは、一つは口調の上の要求からです。即ち、たとえば Ein Schelm von Schriftsteller (人の悪い作家)などというときには、Schelm にも Schriftsteller にも、ほとんど同じ位の Nachdruck を置き、いわば同じ事を『適当の距離を置いて』繰り返すと云ったような気持で云うのですから、その適当の距離(必ずしも時間の長さのみの問題ではなく、心理的な距離です、Schriftsteller も Schelm も、いずれも相当の独立性を保たなければなりません、どちらが主、どちらが従というように聞こえてもならないのです)を得るがためには、Genitiv で結びつく関係ではあまりに関係が密接すぎるから、わざわざ von を用いてゆとりを取るといふわけです。---また、Genitiv を用いないで、必ず von を用いるという点でも、フランス語の影響ということが当然考えられます。(オランダ語では、van がドイツ語の von 以上にフランス語の影響を蒙って、一部分 Genitiv の機能を駆逐しており、また英語に至っては、オランダ語以上に of が発達して、of は全然 Genitiv の代用物となり、the consent of 99 percent of the Japanese residents of this island などと、三つ四つ重ねても構わないほど軽くなり、ほとんどフランス語の de と同じ機能になっています。)

ドイツ語の von は、これらに比べると、ずっと重い。だから、此の Identitäts-von などは、その重さと Nachdruck とによって、最も自然な役目を果たしていると同時に、フランス語の影響を明らかに物語っています。

意味上の特徴

意味の上から云うと、いずれにしても多少罵詈[ばり]的色彩を帯びるのが特徴です。たとえそれが時には好意の表現としての罵詈であるにしろ、とにかく形としては罵詈です。

以下に、少し複雑な文例を引用して見ます。

文 例

1. Obendrein hat mich ein Schelm von Schneider noch sitzen lassen.
[Schiller, *Kabale und Liebe*, I. 5.]
おまけに仕立屋の奴までがわしにおいてけぼりを喰わせやがった。
2. Wenn ich auftrete, zittert ein Herzogtum ! Lass doch sehen, ob mich ein Starrkopf von Sohn meistert ! [Schiller : *Kabale und Liebe*, I. 7.]
吾輩が姿を現わせば天下の公国が縮み上がるのだ。倅風情が我を張ってまるめられるものならまるめて見ろ。
3. Der milzsüchtige, podagrische Moralist von einem Gewissen mag runzlichte Weiber aus Bordelien jagen und alte Wucherer auf dem Todesbett foltern ---- bei mir wird er nimmermehr Audienz bekommen. [Schiller : *Räuber*, IV. 2.]
良心なんて云う気のむつかしい脚痛風に罹った理屈屋みたいな野郎は、揚屋[あげや]から皺くちやの女郎を追い出したり、死にかかった因業[いんごう]おやじを苛[いじ]めたりしていれば好いんだ----吾輩のところへなんか来たってお目通りは絶対に叶わんぞ。
4. Nebenbei gesagt, damals noch ein enges Loch von einem Lokal in einem uralten, wankligen Häuschen, wo aber, was man genieß, vorzüglich war.
[Adlersfeld-Balleström : *Das Zeichen des Ringes*.]
序でに云うと、当時はまだほんのちっぽけな狭い料理屋で、とても古ぼけた、ぐらぐらの家の中にあっただが、それでもかなり美味しいものを食わせた記憶している。

5. Das nenne ich einen Wirt ! Kein kriechender Katzenbuckel, aber doch zuvorkommende Aufmerksamkeit ; feines, gebildetes Betragen, aber doch unermüdlicher Diensteifer, kurz eine Prachtausgabe von Wirt.

料理屋の主人は正に斯くあるべきだ。決して平つく張ってはいないが、そのくせ却々[なかなか]よく気がつく、起居振る舞いも、品があつて、磨きが掛かっているが、そのくせ腰が軽くて、何を頼んでもちつとも五月蠅[うるさ]そうな顔をしない、要するに、旅館経営者の豪華版だ。

6. Eines Tages, nachdem er sich wieder um den Sinn der Dünung und Trübung abgearbeitet hatte, rief er : Wenn ich dieser Bestie von Buch nur erst an einem Flecke beige kommen bin, so gibt sich vielleicht das übrige von selbst ! [*Immermann : Münchhausen.*]

或る日のこと、また例の如く希薄化だの混濁化だのという奴としばらく取っ組んで見た後、彼は思わず叫んだ：此の厄介千万な本め、どこか一個所が判りさえすりゃあ、あとは自然と判るんだろがなあ！

7. Bravo ! Das nenne ich doch noch eine Intrigue ! Diese Prinzen sind gut angekommen ! Die sollen zu tun haben, wenn sie sich herauswickeln wollen ! Die Mutter sagt zu ihnen : wer von euch regieren will, der ermorde seine Geliebte ! Und die Geliebte sagt : wer mich haben will, ermorde seine Mutter ! Es versteht sich, dass es sehr tugendhafte Prinzen sein müssen, die einander von Grund der Seele lieben, die viel Respekte für den Teufel von Mama und ebensoviel Zärtlichkeit für eine Furie von Gebieterin haben.

[*Lessing : Hamburgische Dramaturgie 31.*]

よかろう！仕組みも仕組んだりというのが此の事だ。王子様こそ好い面の皮で、こいつを何とか切り抜けるには並や大抵の骨折りでは済まない。母御の方では『王位に即きたければ恋人を殺しておいで』と仰言る、恋人はまた恋人で、『妾[わらわ]が欲しければお母さんを殺しておいで』と仰言る。勿論王子は二人とも極く徳高き人物で、そしてお互いに心から愛し合っていて、此の悪魔のようなお母さんに対しても、亦此の羅刹[らせつ]の如き恋人に対しても、充分尊敬の念を持っていないと芝居の筋にならないのである。

8. Und dennoch, wie glaubt man wohl, dass die Gottschedin jene acht Worte übersetzt hat ? "Alsdann werde ich meiner Güter erst recht genießen, wenn ich euch beide dadurch werde glücklich gemacht haben." Unerträglich ! Der Sinn ist vollkommen übergetragen [übertragenの古形], aber der Geist ist verflogen ; ein Schwall von Worten hat ihn erstickt. Dieses Alsdann, mit seinem Schwanze von Wenn ; dieses Erst, dieses Recht ; dieses Dadurch : lauter Bestimmungen, die dem Ausbruche des Herzens alle Bedenklichkeiten der Überlegung geben, und eine warme Empfindung in eine frostige Schlussrede verwandeln.

[*Lessing : Hamburgische Dramaturgie --20*]

ところが、Gottsched 夫人はこの八つの単語を一たい何と翻訳したか？"Alsdann werde ich meiner Güter erst recht genießen, wenn ich euch beide dadurch werde glücklich gemacht haben."たまらない！意味は勿論完全に翻訳されている、しかし精神が何処かへ飛んでしまっている。滔々数万言のために押し潰されてしまったのだ。此の *alsdann*, おまけに *wenn* という尾ひれまでくっついて、それから *erst*, それから *recht*, それから *dadurch*. すべて是れ真情の吐露を損なうに反省の煩瑣[はんさ]を以てし、熱情を転じて以て冷ややかなる閉会の辞と化し去ったものに非ずして何ぞやである。

9. Widriger aber sind mir noch alle Speichellecker ; und das widrigste Tier von Mensch [Menschenならざる点に注目せよ！], das ich fand, das taufte ich Schmarotzer : das wollte nicht lieben und doch von Liebe leben. [*Nietzsche : Zarathustra.*]

更に不愉快なるは凡てのおべっか使いなり。凡そ余輩の見出したる最も不愉快なる種類の動物たる人間を余輩は称して寄生虫と呼びぬ。如何となれば彼等は愛せんことを欲せず、しかも愛によって生きんと欲したればなり。

IX 責任の所在を指す von

あまり適当な名称とは思いませんが、当分の間便宜上こう呼んで置くことにします。それは次のような von です。

Es war sehr freundlich von ihm, mir diesen Gefallen zu tun.

私にこれだけの好意を尽くしてくれたのは、彼として実に親切なことであった。

訳はあんまり好い訳ではありません。von ihm だけをどう訳したら最も忠実か、これには、初歩の人を教える時には何時も多少悩まされます。まず「かれとして」ぐらいな所ではないでしょうか。つまり「かれの側から私に対しての仕打ちとして」と云う事です。然し「かれとしては」と云ってはいけません。「は」と云うと「假定強調」の現象になります。「かれとしては大変親切なことだ」などと云うと、彼は元来そう云う親切な人間ではないが.....と云ったような、多少 abwegig な意味が mitschwingen して、少し変な方向へ外[はず]れてしまうからです。Sehr liebenswürdig von Ihnen ! (どうも御親切にありがとう御座います)などと云う際には、それは決して「あなたにしては親切すぎる」などと悪口を云うのではないのです。----わかり切った事ですが、「.....として」という訳語と関係して老婆心までに述べたわけです。

次には、此の von を用いる際の Grammatische Situation (文法的局面) 或いは Grammatische Konstellation (文法的星位) ですが、約言すると、次のような条件が揃っていないければならないのです。

1. von は人間を指す語を支配する。 von ihm, von Ihnen, von deinem Vater 等々。(勿論人間以外のものもありますが、それは人格化して考えるのです、たとえば Es ist höchst blödsinnig von den Feiertagen, dass sie zuweilen mit Sonntagen zusammenfallen 時々日曜日と同じ日になるというのは、祭日として少し人を馬鹿にした話である)。

2. Nennsatz (命名文)の一文枝として現われる。----「AはBである」という関係を云い表わす文を、Sanders に従って Nennsatz と名づけると、此の von は必ずそうした Nennsatz にのみ現われます。Nennsatz の大部分は、sein を介して主語と述語(Prädikatwort) とが結びつけられます。たとえば Ein Satz, der das Verhältnis A=B ausdrückt, ist Nennsatz は Nennsatz です。ist が heißt になっても wird.....genannt になっても同じです。また Man nennt den Satz, der das Verhältnis A=B ausdrückt, einen Nennsatz と云っても、茲では主語も述語も四格になっているけれども、やはり nennsatz (実例は最後の文例によって研究されたし)

von の元来の意味との関係

此の von を、責任の所在を指す von と命名した訳は、是れも文例によって自然明らかになると思いますが、一寸特有な現象ですから、von の元来の意味(というよりは寧ろ von の最も普通な意味)と如何なる関係があるかを多少明らかにして置く必要があると思います。

Nennsatz には必ず A=B の関係が対立結合していますが、その B.....即ち「述語」の方は、形容詞の場合と名詞の場合との二つがあります。たとえば er ist klein と er ist Knirps, -- er bleibt dumm と er bleibt ein Kamel, -- er wird berühmt と er wird eine Zelebrität 等々。---- ところで、問題の von が一寸奇異な感じを与えるのは、主として述語が形容詞の場合であって、述語が名詞の場合には、別に何でもないことが多いのです。たとえば----

Es war ein Missverständnis von Ihnen, wenn Sie glaubten, meine Anspielung ginge auf Ihre Person.

私の云ったことがあなた個人に対するあてこすりだと思いいになったとすれば、それはあなたの誤解です。

あなた「の」というのは、換言すれば、あなた「の方から」私に向かって差し向けられた、の意で、つまり「からの」の意です。この派生、出所を指す von(二格の原意も同じ)は、これが von の原意なのです。

文 例

1. Ich finde das doch unerhört von dir !
それは貴様として実に怪しからんではないか！
2. Das war sehr vernünftig von ihnen, dass sie darauf verzichtet haben !
彼等がそれを断念したのは、彼等として非常に賢明な策だった。
3. Es war ein dummer Streich von mir, oder der Satan hat mir ein Blendwerk vorgemacht.
おれとしたことが、また何という馬鹿なことを仕出かしてしまったものだろう、それとも悪魔の奴がおれを誑[たぶら]かしおったな？
4. Es war einfältig von mir, dass ich dich Sie nannte, aber ich war so überrascht, ich erkannte dich nicht.
君に「あなた」なんて云ったのは、僕はどうかしていたのだ、ところがあまり突然だったものだから、誰かと思ったのだよ。
5. Es ist gemein von dir, dass du vom Spiel aufstehst, wo ich dir Revanche geben will.
おれが折角復讐戦をしようと思っているのに、勝負をほったらかして立ち上がるなんて、君として実にけしからんじゃないか。
6. Es ist recht liebenswürdig von Ihnen, zu einer armen Kranken zu kommen.
病氣見舞においで下さいまして、ほんとうにありがとうございました。
7. Das war unehrerbietig von dem Sohn ! [Schiller : Jungfrau von Orleans, II. 2.]
それは息子として甚だ無礼な仕儀だ。
8. Das muss ich ablehnen, das ist wohl nur ein Witz von dir !
そいつは真っ平御免を蒙りたいね、君は恐らく冗談を言っているのだろう。
9. Das ist hübsch von euch, Kinder, dass die eine nichts auf die andere kommen lässt -- das ist die wahre Freundschaft.
みなさん、あなた方がお互いに庇[かば]い合いをなさるのは、勿論みなさんとして大変好い行いです----それが本当の友情ですよ。
10. Es ist gar hübsch von einem hohen Herrn, so menschlich mit dem Teufel selbst zu sprechen. [Goethe : Faust]
悪魔風情とまでもこのように好くわかったお話をして下さるとは、偉いお方なのに、さても奇特なことをごさる喃[のう]。
11. Aber es ist wirklich schön von dir ; es tut mir nur leid, dass du deiner Braut unnütz die Augen rot machst. [Otto Ludwig, Zwischen Himmel und Erde.]
しかしまあよく帰って来て呉れた、ただ、何の理由もなく花嫁君を泣かせて置くというのは実に罪な話だね。

12. Diese guten Bürger sind entzückt über unser Arrangement. ---- Das mit dem Fest war ein vortrefflicher Gedanke von Ihnen, Blumenberg ! [G. Freytag, die Journalisten.]
市の野郎どもめ、おれたちの計画を聞いてとても喜んでいるそうだぜ----とにかく君の発案による夜会の件は上乘の案だったね、ブルーメンベルク。

13. Es ist in jedem Fall sonderbar von dem Fräulein, dass sie lieber bei den Leuten zu Hause bleiben will, als ihren Vater zu ihren Verwandten begleiten ? Nicht ?
[Strindberg, Fräulein Julie]
お父さまと御一緒に親戚の人たちの所へお出ましにならないで、使傭人たちと一緒に留守をなさるなんて、いずれにしてもお嬢さまのなさることは一寸変だと思わないかい？

14. Ich weiß wirklich nicht, ob es gerade taktvoll von meinem Herrn Nachfolger ist, immer wieder auf seine Vorgänger zu verweisen. Aber wenn man nervös ist, beliebt man oft gegen andere zu polemisieren.
私の後釜に据わったあの方が、又しても又しても、先に居た者の事を引き合いに出してかれこれ仰言るのは、世間的に云っても多少どうかと思いますね。しかしまあ、機嫌でも悪いときには、つい人の悪口も云いたくなるものでしょうね。

X 験 証 の an

an の原意、即ち具体的意味は、或る物の『表面に接して』です。此の具体的な意味が抽象的・象徴的・類推的・譬喩的に用いられて行く経路には色々ありますが、此の an もその一つです。
たとえば、『まず廿日鼠やモルモットに就いて実験する』ならば：
Man experimentiert zuerst an Mäusen und Murmeltieren.

ですが、此の際の an は正に日本語の『.....に就いて』です。就いてというのは、換言すれば『即して』或いは『実際の場合にあたって』などと云う際の『あたって』です。就くとか、即するとか、あたるとか云うのは、つまり或る物の本体の表面にぶつかって、その表面、即ち或る物の我々の方に向けられた側(経験可能なる範囲に於ける或る物の本質自身と云っても好い)をば何等かの行為(唯今問題にしている場合では検証)の行われる場所にする事です。

an の一般的な話になりますが、物自体のことを Ding an sich と云うのなどもそれで、Kant に従えば、それは経験不可能なるものではあるかも知れませんが、それは決して『凡ゆる意味に於いて』経験不可能なのではないのです。もしそうであったら、むしろ Ding in sich 或いは Ding hinter sich とでも云った方が好いでしょう。an sich という以上は、何等かの意味に於いて、たとえば形而上的にでも、その表面(an)にまで迫ることが出来、その表面に『即して』(an)何等かの----たとえ古い意味の認識ではなくても----意識活動が行われ得なければなりません。物自体を指すのに、Ding in sich と云わないで、一見自身を裏切ったような an を用いて来たドイツ語の習慣の中には、不知不識の間に顕れた現象学的解釈が働いていたと云うべきです。如何となれば、『内部』と云い『外部』『表面』と云うのは、結局

Nichts ist drinnen, nichts ist draußen ;
Denn was innen, das ist außen. -- Goethe, "Epirrhema."--

で、本質は直ちに以て現象であり、現象は直ちに以て本質です。

So ergreift ohne Säumnis
Heilig öffentlich Geheimnis. -- ibid --

つまり Goethe の自然観は Ding an sich を『公然の秘密』(öffentlich Geheimnis)と観た所にあります。換言すれば Ding an sich の an を、習慣通りの『自体』、即ち殆ど in, hinter に近い意に取ることと、an をその原意にかえて『表面に即して』と解することとが、結局同じだということにあります。

事実 an の用い方は、始終その両者に跨がっています。というよりはむしろ其の両者を現象論的に統一せしめようとする意識がドイツ人の持っている an に対する語感として常に働いているのです。それは、空間的な観方をしてはいけない縄張りにまでも空間的な前置詞をあてはめなければならない歴史的関係のもたらした当然の結果です。

話が少し厄介になって来ましたが、こんな事を持ち出したのは、an の空間的意味『.....の表面に接して』をば、空間とは何の関係もない抽象界に持って来た際に、その抽象界に於ける『意味形態』という実体を主にし始めるや否や、an の原意が段々と変わってきて、むしろ an の反対とでもいふべき an でもよかろうと思われるほど物自体に即した意味になる経過をのべた訳なのです。故に、an の象徴的意味形態を対象にしてその本質を突き止めようというときには、もはや空間的な an, in の考え方に囚われることはむしろ本質を把握する邪魔にこそなれ、大して証する所は無いのです。むしろ an 等の空間的な表象が我々の精神活動・概念操作、大きく云えば哲学をまでも語学的に毒する事が如何に大であるかを感じべきです。多少たりとも近世の、殊にドイツの哲学の辿って来たあとを見るものは此の事を痛感せざるを得ないだろうと思います。

故に、今問題にしている an も、むしろ直観的に、最初与えた訳語『.....に就いて』『.....に即して』『.....に当たって』『.....に実際ぶつかって』或いは『.....に於いて』等から生ずる意味形態を一つの実体として把握し、同時に『どんな意味の動詞と共に用いられるか?』をはっきり見極めて頂きたい。たしかに中心はあり、本質はあるのですから把握し得ると思います。---如何となれば、前述の an sich の語が直ちに以てまた吾人の研究方針の問題なのであって：

*Mais il faut s'habituer à penser l'Être directement,
sans faire un détour, sans s'adresser d'abord au fantôme
[.....] qui s'interpose entre lui et nous. (Bergson, L'évolution créatrice, p. 323.)*

然し、廻り路をしたり、先ず実体と吾人との間に割り込んで来る幻影を相手にしたりなぞしないで、直接に実体を考えるような習慣をつけるべきである。

幻影(此処では、『表面』とか『中』とかいう考え方は、実体(此処では an の一用法)の大体の見当と所在とを暗示するだけの役目を持って居るきりなので、見当がわかった後は、断然その考えを捨てて考えなければならないと云う訳なのです。

文 例

1. Die Erfahrung zeigt jedem, der sie **an sich selbst erproben** will, die Wahrheit dieses Satzes.

経験は、誰でもそれを己自身に就いて試みんと欲する者に向かって、此の命題の真なることを示す。(吾が身に就いて検すれば次の主題の真なることが判る)。

2. Er erzählte mir, deine sämtlichen früheren Liebhaber hätten die gleiche **Erfahrung an dir gemacht**.

おまえの以前の愛人たちはすべておまえに就いて同じ経験を嘗めていると、かれが私に物語った。

3. Gerade **an** den Nationalsozialisten kann man **lernen**, dass der Siegesrausch vor dem Siege gefährlich ist.

勝利以前に勝利に酔うことが如何に危険であるかを丁度此の国粋社会黨員たちに就いて学ぶことが出来る。(.....が絶好の例証である)。

4. Ich will die Wahrheit meiner Behauptung **an** einem Beispiel **zeigen**.

私は私の主張の真なることを、一つの例に就いて示そうと思う。
(**zeigen** の代わりに、**dartun**, **veranschaulichen**, **an den Tag legen**, **beweisen**, **bekunden**
其の他同意の動詞ならば何を持って来ても好い訳です)。

5. Das kann **an** einzelnen Beispielen auf eine sehr interessante Weise **erläutert werden**.

それは個々の例に即しつつ非常に興味多く例証註釈することが出来る。

6. Man **studiert** die Schönheit **an** Modellen.

人は美を実例に就いて研究する。

7. In diesem Kapitel wird das Verhältnis von Politik und Moral zueinander **am** Beispiel Talleyrands **erörtert**.

此の章に於いては、政治と道德との関係がタレイランの例によって論じられている。

8. Man braucht also das, was du sagst, nur ein wenig **an** der Wirklichkeit **zu messen**, so zeigt es sich bestenfalls als Literatur.

かるが故に、君の云う事は、試みにこれを少しく現実に就いて比較して見ると(現実にあてがって、現実を物尺にして検して見ると)、良く言って先ず『文学』だね。

9. Dieser berühmte Doktor hat oft **Wunder getan an** Menschen und Vieh.

此の著名な医者、人間をつかまえても亦畜類をつかまえても往々にして奇跡を行った。(「仕打ちの **an**」との中間現象。)

10. Dass mancher scheinbare Einklang zwischen Gebot und Instinkt von vornherein das eine oder das andere in Nachteil setzt, **erweist sich** schon **an** Einfachstem : Niemand wird es sittlich nennen, wenn einer aus Appetitlosigkeit fastet.

(*Herbert Cysarz, Literaturgeschichte als Geisteswissenschaft.*)

おきてと本能との間の外見的一致なぞというものには、そのいずれかを不利に陥入れる種類のものが多いということは、既に極く簡単な事実について証明される、即ち、一人の男が食欲減退のために断食しているとすれば、誰もその男を有徳であると謂いはしないであろう。

11. Nur soweit die Historie dem Leben dient, wollen wir ihr dienen : aber es gibt einen Grad, Historie zu treiben, und eine Schätzung derselben, bei der das Leben verkümmert und entartet : ein Phänomen, welches **an** merkwürdigen Symptomen unserer Zeit **sich zur Erfahrung zu bringen** jetzt ebenso notwendig ist, als es schmerzlich sein mag.

(*Nietzsche, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben.*)

歴史が生に仕える限りに於いて我々は歴史に仕えんことを欲する。けれども、動ともすれば生を萎靡[いび]せしめ頹廢せしめるような歴史の評価法、歴史研究の程度というものがある。此の現象をば現代の注目すべき或種の徴候に就いて親しく実感を得て見るという事は、只今のところかなり厭な事であると同時にまた非常に必要なことである。

12. Vom Erleben ausgehend, setzt Dilthey bei den autobiographischen Zeugnissen ein, um **an ihnen**die Lebenskategorien **an der Quelle zu ergreifen**.

(*G. Misch, Lebensphilosophie und Phänomenologie.*)

Dilthey は、『体験』なるものから出立して、先ず自伝的証拠から検べ挙げ、それらの証拠からして生の範疇の源泉を掴み取ろうとしている。

13. Zwei Reisen nach England hatten mir die Begriffe und Eindrücke, die ich früher im Umgang mit Einzelnen empfangen, **am vollen Leben rektifiziert und vermehrt.**

前後二回の英国旅行が、平素個々の英国人と交際しながら得ていた私の概念と印象とを、こんどは生きた実地に就いて訂正し且つ豊富にしてくれた。

[備考] 検証の an は、或る点に於いて。しばらく前に述べた『仕打ち』の an とよく似ているから注意を要します。(文例の 9 が一寸中間現象) こういう場合にはすべて動詞がどんな意味であるかを規準にして分類すべきで、動詞の意味によっては中間現象も生ずる訳です。----その他、三格支配の an の象徴的な用法を要求する動詞はお互いに非常に混同され易いものですが、はっきりと認め得る数個の群れが存在することは確かです。

XI
『場 合』 の bei

私の許で、私の家で、等という際の bei は恐らく改めて説明するにもおよびますまい。また、食事の際に (beim Essen)、読書の際に (beim Lesen) 等という場合の bei も、これも初歩の知識に属するでしょう。すなわち bei の最も普通な用法を概括して論ずると次の様な事になります。(此の際 bei がどの意味になるかは、bei によって支配される名詞の性質に拠る点に注意して頂きたい。すべての前置詞が全部こう云う風に其の次に来る名詞によって用法を判別し得るとは云えませんが、bei の場合にはそれが手際よく片づくのです。)

- [1] 空間を占める具体名詞を支配する際には『の側で』の意。
例：bei der Schule (学校のそばに) beim Dorf (村のそばに) beim Tore (門の脇に) bei Leipzig (ライプツヒ附近) die Schlacht bei Mukden (奉天附近の会戦)。
- [2] 時間を占める抽象名詞を支配する際には『の際に』の意。
例：beim Schlafengehen (就寝の際) beim Examen (試験の際) bei der Arbeit (仕事の際) beim Baden (沐浴の際)
- [3] 人を意味する名詞を支配する際には『.....の宅で』『.....の許で』の意
例：Bei mir ist alles frisch und gesund (僕のところではみんな達者です) Ich bin bei meiner Tante zu Gast (僕は伯母のところ遊びに来ている)----つまり、人間の際には、運動を現わすのは zu, 静止を現わすのは bei と思えば好い。(bei mir 僕の許で、zu mir 僕の許へ)。
- [4] 時間も空間も占めない抽象名詞を支配する際には、『.....の故に』(原因、理由)を現わす場合と『.....にも拘わらず』を意味する場合と、及びその中間現象との三つの場合がある。これはいずれ詳しく論ずる機会があるでしょうから茲では省きます。

まず以上が bei の最も普通な用法を名詞の類別を Kriterium として検出する方法です。この方針は、殊に初歩の人に bei の用法を明確に教える際には、これ以上のはっきりした纏め方はないと思います。凡ての前置詞が斯ういう風に行けば申し分なしですが、そうは行きません。

さて次は今回の Thema の『場合』の bei ですが、それは例えば次の様な用法です。すぐ此の場合の問題に結びつけて次のような事を云う事が出来るでしょう：

Die obenerwähnten vier Hauptbedeutungen der Präposition "bei" dürften wohl als bekannt vorausgesetzt werden ; aber bei der fünften wird die Sache schon etwas komplizierter. (以上に述べた前置詞 bei の四つの主要な意味は先ず解ったものと前提しても差し支えなからう。ところが第五の場合となると、問題は一寸面倒になって来る)。

此の **bei** は、訳語でもわかる通り、『.....の場合には』或いは『.....となって来ると』です。これは、たとえば *wir sind hiermit bei der fünften Bedeutung des Bei angelangt.* (我々は愈々 **bei** の第五の意味に辿り着いた) などと云う際の **bei** から起こったものです。

『.....の場合は』等の訳語で解釈するのが最も妥当と思われますから、仮に『場合の **bei**』と呼んで置きます。何時も教室で言う洒落を又茲でも云わなければならなくなつて一寸きまりが悪いが、つまりバイはバアイなのです。

Wenn-Satz の短縮形としての **bei**.....

此の **bei** は、或種の名詞、或種の句を伴うという、仮定文(*wenn*....., *falls*....., *im Falle*.....)を短縮した句としての機能を持っています。簡潔を尚[たつと]ぶ学術書公用文等に於いて好んで用いられる **bei** です。たとえば：

年収二千馬克[マルク]に充たざる場合には所得税は問題にならない。

といおうとすると、*wenn*, *falls*, *im Falle* を用いれば一寸長くなります：

Falls das Jahreseinkommen nicht 2000 RM beträgt, kann von einer Einkommensteuer nicht die Rede sein.

Bei を用いれば極く短くてすんで副文章が単なる句(文肢)になって来ます：

Beim Jahreseinkommen unter 2000 RM kann von einer Einkommensteuer nicht die Rede sein.

文が句で云い表わせ、句が文で云い表わされるという事は極く普通の現象で、殊に前置詞と接続詞との間には平行した同意義のものが非常に多く、時には *bis*, *seit* の如く、前置詞と接続詞とが形の上でも同じだという事は、文章論上の重要な問題を暗示しているかに思われます。つまり、接続詞、前置詞などと呼ぶ代わりに、両方とも単に前置詞と呼んだ方が文章論的には合理的なのです。ただ一方は文章に前置する前置詞であり、他は名詞(または名詞に準ずるもの)に前置する前置詞だというだけの相異です。こういう点からも従来の文章論は根本的に再組織されなければならないでしょう。

分詞の機能

此の **bei** を用いる際に重要な役目を帯びて来るのは、過去分詞(*gesehen*) 現在分詞(*sehend*) 未来受動分詞(*zu sehend*) ----勿論形容詞も含まれるが----の三分詞です。**Wenn-Satz** との関係に於いて観察すると、次のような事になります。

[1] **bei** によって支配される名詞の客語たるべき動詞は現在分詞冠飾句に依って表わす。

(1) 『基礎知識が欠けている場合には』 = *Wenn die Grundbegriffe fehlen* 又は *Bei fehlenden* (又はむしろ *mangelnden*) *Grundbegriffen*.

(2) 『物価が騰貴する場合には』 = *Wenn die Warenpreise steigen* 又は *Bei steigenden Warenpreisen*.

[2] 但し、**sein** 支配の動詞で、その意が過去なる時は過去分詞を用いる。

『意識が一たび目覚めた暁には』 = *Im Falle das Selbstbewusstsein einmal erwacht ist* (又は *sein wird*) 又は *Bei einmal erwachtem Selbstbewusstsein*.

[3] **bei** によって支配される名詞を、**Wenn-Satz** ならば元来四格に要求すべき筈の動詞は、これを過去分詞冠飾句で表わす。

(1) 『その結果を仔細に観察する時は』 = *Wenn man das Ergebnis genau beobachtet* 又は

Bei genau beobachtetem Ergebnis.

(2) 『一たびその原因を突き止めた上は』 = Wenn man einmal die Ursache festgestellt hat
又は Bei einmal festgestellter Ursache.

[4] bei によって支配される名詞を、Wenn-Satz に於いてならば元来四格に要求し、同時に"können" "müssen" "wollen"を伴う可き筈の動詞は、未来受動分詞の冠飾句として用いる。

『意見を変更しなければならぬ場合には』 = Wenn man seine Ansicht ändern muss
又は Wenn die Ansicht geändert werden muss 又は Bei zu ändernder Ansicht.

[5] bei に依って支配される名詞の述語たる可き形容詞は附加語として附す。

『天気良ければ』 = Wenn das Wetter schön ist 又は bei schönem Wetter.

文 例

1. Noch klarer als bei allen Vorgängern tritt in Schopenhauer die Eigenart des deutschen Denkens heraus.

ショーペンハウエルに於いては凡ての先進の場合に於けるよりもなお一層明瞭に独逸式思索の特性が際立っている。

2. Die Gesamtsumme der Haare eines Kopfes schätzt man bei stärkstem Haarwuchs auf 80,000 bis 100,000.

人間の頭髪の総数は、一番よく生えている場合ならば八万乃至十万と見積もられている。

3. Früher brachte der Stadtforst von 5,000 Morgen etwa 30.000 bis 40,000 Mark Reinertrag, bei den gesunkenen Holzpreisen wird er jetzt einen Zuschuss erfordern.

市所属の五千モルゲンの造林は、以前は三万乃至四万マルクの純益を齎らしたのであったが、木材の価格が下落した今日では、むしろ食い込むことになるであろう。

4. Die hässlichen Patentstreitigkeiten, die uns den Tonfilm so lange vorenthalten haben, werden uns beim Fernsehen erspart bleiben.

トーキーの応用開始を長い間阻止していたかの醜い特許争議は、テレビジョンの場合には多分無くて済むであろう。

5. Die Unterzeichnung ist persönlich vorzunehmen und soll Vor- und Zunamen, bei Frauen auch den Mädchennamen, Beruf und Wohnung enthalten.

署名は本人に於いて之れを行い、姓、名、(及び婦人にあつてはその元姓)職業、住所を記入する。

6. Es gibt jetzt großartige Prothesen, du merkst damit garnicht, dass dir etwas fehlt. Sie werden an die Muskeln angeschlossen. Bei Handprothesen kann man die Finger bewegen und arbeiten, sogar schreiben. [Remarque, Im Westen nichts Neues]

今じゃあとても素ばらしい義足義手があるよ。それをはめてれば、自分の身体の故障なんかでんで気がつかない。直接筋肉に結合するんだそう。義手なら、指を動かすことも出来れば、仕事をする事も出来る、それどころじゃない、字を書くことさえ出来るんだ。

7. Drei Dinge, fing er an, sind bei einem Gebäude zu beobachten : dass es am rechten Fleck stehe, dass es wohl gegründet, dass es vollkommen ausgeführt sei.

[Goethe, Wahlverwandtschaften.]

『建築の場合には、注意すべき点が三つある』とかれは語り始めた。『まず場所が適当であること、その次には基礎工事がしっかりしていること、次には工事の実施が完全に行われていることだ』。

練習問題

(下線したる前置詞が本書に於いて取り扱いたる孰れの形態に属するやを判別すべし。)

1. Mich dauern die jungen Leute, wenn ich sie Tag und Nacht Griechisch, Lateinisch, Französisch und Englisch so fleißig in ihre kleinen Köpfe hineinstopfen sehe. Warum müssen sie denn in ihren jungen Tagen so vieles lernen? Ist das alles nicht wie eine unnütze Last, die man ihnen aufbürdet, an der sie zeitlebens keuchend schleppen müssen ?
2. Eine Forderung läuft Gefahr, vergessen zu werden und allmählich abzustumpfen, wenn man sie allzuoft wiederholt. Wenn man sie lange Zeit erhebt, ohne dass etwas mit ihr geschieht, schläft das Gehirn genau so ein, wie der Arm einschläft, wenn er lange Zeit etwas hochhält.
3. Ich war nicht mehr wütend auf die Belgier, wenigstens meistens nicht, sondern mich grauste vor ihnen und vorm Kriege, diesem Kriege mit seinem Völkerhass. (*Renn, Krieg. S. 51.*)
4. Er verzichtete zugleich schriftlich auf die Schulstelle im Buttergau und war und bieb wieder, was er gewesen, der ärmste Schulmeister der kleinsten Schule des ganzen Landes, und schrieb weiter an seiner Geschichte von Neideck. (*W. H. Riehl, Burg Neideck.*)
5. Ihr Leute, ihr Leute ; da sieht man's wieder. Da hätt' ich doch Steen und Been geschworen -- ! aber nicht bloß ich, nicht bloß ich aleene ; wir alle mit 'nander, drieben in Quolsdorf, dass Sie die Mutter wär'n zu dem Dingel. (*Hauptmann ; Fuhrmann Henschel*)
6. Zum erstenmal bauten Engländer Tanks, d, h. gepanzerte Autos in Form von Behältern. Im Heeresbericht stand zu Anfang des Krieges noch zu lesen : "Autos rollen über das Schlachtfeld " Ein Jahr nur später bei Cambrai erster Masseneinsatz der Engländer mit 400 Kampfwagen auf einem Abschnitt von rund zehn Kilometer Breite. Der Erfolg war groß. Mit diesen Ungetümen von Riesenraupen stießen sie sieben Kilometer tief in die deutsche Front vor.
7. Ermattet und tiefatmend trat ich aus diesem großen Geschäftshaus am Halleschen Tor auf die Straße hinaus. Die Verhandlung hatte volle zwei Stunden gedauert, das Warten auf die Verhandlung schon mehr als eine halbe Stunde. "Aber immerhin," sagte ich mir auf der Straße, indem ich nun ohne Ziel in die Stadt hineinspazierte, "aber immerhin war es ganz nett von diesem dickbäuchigen Herrn Direktor, dass er so freundlich mit mir war und mich solange aufhielt."
8. Die meisten Schauspiele werden ganz bequem zusammengezimmert und die Aitoren denken dabei an nichts weniger, als an all die Regeln und Vorschriften der dramatischen Technik. Es wird ganz fahrlässig exponiert, auch mit der Lösung des dramatischen Knotens, welche eine der schwierigsten Aufgaben darstellt, macht man es Gott weiß wie leicht.
9. Das Dienstmädchen trat mir in die Stube und sagte, ein ganz nett gekeideter Herr wäre angekommen, er bitte, gleich vorgelassen zu werden, er hätte einen Empfehlungsbrief von meinem früheren Kollengen Aber ich war zufällig in einer hässlichen Stimmung und unterbrach sie brüsk, indem ich sie anhunzte : Sagen Sie dem nett gekleideten Herrn, dass er sich mit seinem Empfehlungsbrief zum Henker packen möge.
10. Denn wenn der Smaragd durch seine herrliche Farbe dem Gesicht wohltut, ja sogar einige Heilkraft an diesem edlen Sinn ausübt, so wirkt die menschliche Schönheit mit noch weit größerer Gewalt auf den äußeren und inneren Sinn.

11. Ein vollkommenes Versagen der eigenen Denkfähigkeit reißt sie mit in den wirren Traum hinein, dass unser Land durch eine Gewaltoperation an seinen Menschen und an seinem Kulturbesitz Rettung aus dieser schwersten wirtschaftlichen Not finden könnte.

12. Was nun an seiner äußeren Erscheinung an Unordentlichem und Chaotischem wahrzunehmen ist, das kann auch in allem, was er seit einigen Jahren in allen Zeitungen und Zeitschriften veröffentlicht, gleichmässig beobachtet werden.

13. Der Stallberg hat mir erzählt, Herr Doktor, dass Sie sich für einen Menschen verwenden ? Sehr schön von Ihnen ! Ich weiß alles. Ich meine, es wird sich nicht viel tun lassen, das ist ja ein schrecklicher Kerl ; aber das unfassbar Persönliche und Gnadenbedürftige, das jeder Christenmensch in sich hat, zeigt sich oft gerade an so einem Subjekt, und wenn man selbst etwas Großes unternehmen will, soll man am demütigsten der Hilflosen gedenken.

(Robert Musil, Der Mann ohne Eigenschaften, S. 279.)

14. Das vorige Jahrhundert in seinem Idealismus sah die Welt aus der Vogelperspektive an ; dieses in seinem Spezialisismus sieht sie aus der Froschperspektive an ; hoffentlich wird das nächste in seinem Individualismus sie aus der für Menschen einzig berechtigten, nämlich aus der menschlichen Perspektive ansehen.

(Langbein, Rembrandt als Erzieher, S. 61.)

15. In der Großstadt war er ganz unbekannt, ein Mann von der Straße wie man sagt. Aber hier auf dem Lande, in dem Dorf, wo er geboren war und wo ihm jeder Baum, jede Hecke, jeder Meilenstein ein bekanntes Gesicht trug, war er bald eine Notabilität, eine wichtige Person, ein gefeierter Mann, ein Hecht im Karpfenteich. Bald hatte sich alles, was in der Umgegend von intelligenten jungen Menschen war, um ihn versammelt.

16. Deine Theorie ist vortrefflich, dagegen habe ich nichts einzuwenden. Leider kommst du mit deiner vortrefflichen Lehre zu spät. Denn dasselbe hat ein englischer Philosoph vor bald hundert Jahren behauptet.

17. Nathan : So wirst du ohne Zweifel wissen wollen,
Was ich auf meinem Wege von dem Feinde,
Der allerdings sich wieder reget, etwa
Bemerkt, getroffen ? Wenn ich unverhohlen

Saladin : Auch darauf bin ich eben nicht mit dir
Gesteuert. Davon weiß ich schon, so viel

Ich nötig habe. *(Lessing, Nathan der Weise, III.)*

18. Sie "dämmerten" sich nicht zu Tode, ---- das lügt man wohl ! Vielmehr : sie haben sich selber einmal zu Tode ---- gelacht ! Das geschah, als das gottloseste Wort von einem Gotte selber ausging, ---- das Wort : "Es ist ein Gott ! Du sollst keinen andern Gott haben neben mir !" ---- ein alter Grimmbart von Gott, ein eifersüchtiger, vergass sich also : ---- Und alle Götter lachten damals und wackelten auf ihren Stühlen und riefen : "Ist das nicht eben Göttlichkeit, dass es Götter, aber keinen Gott gibt ?"

(Nietzsche, Zarathustra, "Von den Abtrünnigen.")

19. Wie stünd' es um die Sicherheit der Staaten,
Wenn das gerechte Schwert der Themis nicht
Die schuldige Stirn des königlichen Gastes
Erreichen könnte, wie des Bettlers Haupt ?

(Schiller, Maria Stuart, I.)

20. Der Geschmack eines Alkoholgetränkens ist nicht zum wenigsten davon abhängig, was man dazu isst. Zum Bier esse ich am liebsten Erdnüsse oder Käse, zum japanischen Wein rohe Fische (Saschimi) mit viel geriebenem Meerrettich, zum Wein ---- na, ich trinke nie Wein, der kostet mir zu teuer.

21. Da kommt er herangekrochen, bleich, lachend, hohläugig ---- der Wahnsinn ; still, ohne Laut drückt er die Pantherzähne in mein wirres Hirn, leckt mit seiner feinen, spitzen Zunge an meinem Herzen. (*Brachvogel, Narziss, II.*)

22. Bevor ich das Manuskript in die Druckerei schicke, lese ich es wohl zwei- oder dreimal durch. Denn dann habe ich nachher bei der Korrektur nichts mehr am Werk zu streichen und zu berichtigen.

23. Der Mensch ist nur darum mit seinem Geschicke unzufrieden, weil er noch nicht begriffen hat, wie notwendig dasselbe ist und wie folgerichtig es eintritt. Wenn er so einsichtig wäre, das alles in klarem Licht zu erblicken, so würde er das Schicksal in seiner unumgänglichen Notwendigkeit nur noch bewundern müssen.

24. Während ich ihn zu meinem Bundesgenossen hatte und jeden Tag mit ihm verkehrte, fiel mir an allem, was er tat, nichts Verdächtiges auf. Erst als wir uns ausgesprochene Feinde geworden waren, kam mir auf einmal manches zum Bewusstsein, was man mir einst über ihn erzählt hatte und woran ich nicht gern denken mochte. Und jetzt erst sah ich ein, wie unedel der Mensch eigentlich an mir gehandelt hatte.

25. Wer mitten in einer Gesellschaft sein Vaterland so arg verleumden hört und eine gleichgültige Miene dazu macht, der ist entweder ein Feigling oder ein Idiot.

26. Gestern Abend traf ich seine Frau in der Stadt auf dem Weihnachtsmarkt. Sie wohnt jetzt bei ihrem alten Onkel auf dem Lande ; sie war nur auf Einkäufe auf dem Markt.